

俳句雜誌

令和四年十月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五卷第十号

水明

2022 10月号



《今月のかな女》

丸き石が尼の墳なり秋の草

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

片田舎にある庵寺の一隅。そこに以前庵主であった尼法師の墓がある。突き固めた土饅頭の上に、丸味のある天然石が載ったまことに質素な墓である。石は何処かの川で、永年水に磨かれたのか、きれいな肌である。俗世での辛い人生に終止符を打ち、この庵に身を置き仏に帰依して生涯を閉じた人であろうか。滅多に訪れる人の無いこの墓に眠る人にとって、いま秋草がよき話し相手になっている。

(鬼之介・註)

水 明

第1105号

— 華の一句 —

棟 梁 の 女 房 と い ふ 朝 の 虹

石 山 かつ子

俳句は、十七文字という原則の中で、どうしても省略せざるを得ぬ文言が発生する。掲句の場合は、「朝の虹」の前に、「生活の中で観る」の言葉が隠されているものと判断した。若い者の面倒をよく見て亭主を輔けた江戸時代の棟梁の御上さんのように、きびきびと立ち働いている現代版工務店主の妻の姿が活写されている。

(鬼之介・推薦)

水明

令和4年
10月号

今月のかな女

華の一句

古書肆 (作品)

畦道 (近詠)

夏ふたたび (近詠)

風 琴 雪欄作家近詠鑑賞

硯 箱 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

石井喜恵

五明 昇

町野広子

井口俊晴

菊池ひろこ
五明
境延昭
ほか

大場順子
山田美佐尾
高島寛治
ほか

近藤徹平
大塚茂子
青木鶴城
ほか

中西夕紀

網野月を



新同人紹介

夏季競詠

由良ゆら女
大橋 旭代
矢作 水尾
ほか

夏季競詠作品評

山本 鬼之介

水 琴 窟 (水明集八月号鑑賞)

池田 雅夫

山 紫 集

66

鼓 笛 集 (同人作品)・私の一句

72

俳誌望見

梅澤 佐江

39

句集喝采

近藤 徹平

75

水明の記事他誌転載

76

水明例会報・各地句会報

81
・

新珠賞作品募集

89

水明塾のお知らせ

90

風声・発展基金御礼

93

後記

94

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

古書肆

山本鬼之介

鬼灯鳴らす古里のなき者同士

爽秋の姿見占むる女振り

足の指使うて物を取る夜長

登高やいま富士塚の頂に

古書店の叩はたきのリズム秋の昼

曼珠沙華咲かせ坪庭異界めく

佳宵三更都大路を吟じつつ

新酒酌み朝令暮改嘆くかな

蛙道

石井喜恵

白鷺の田に下り一步忍び足
野菊晴背に溢るる野菜籠
すれ違ふ人みな陽の香稻刈る日
残菊や木偶の如くに田の鴉
丸木橋風を乗り継ぐ赤とんぼ
鴟の贄風あるやうにそよぎけり
暮れてなほ草叢熱ききりぎりす

家の前の坂を下りバス通りを横切ると、一面に見沼田んぼが広がる。此処に住んで既に半世紀近く、その移り変りをずっと見て来た。夜も眠れぬほどの蛙の声も今は殆ど聞く事ができない。子ども達と芹摘みをしたり、ざりがに取りに夢中であつた道も舗装され、車の通る抜け道になつてゐる。遙か田の上を高速道が走り、新都心の方を見ると高層ビルが建ち並び、さながら異国にいるような気持になる。とりわけ秋の夕焼空は美しく、刈田の中に三脚を立てカメラのシャッターを押す姿を良く見掛ける。そして私も句作に行き詰まると自然に足が向いてしまう。「おつと危ない」車が横を通り過ぎて行った。

夏ふたび

五 明 昇

魔女狩りし広場の市のさくらんぼ
フォロ・ロマーノの柱石走る青蜥蜴
ハンカチに畳む夕日のエーゲ海
ライン下りの余韻沸々髪洗ふ
ネツシーに遇へず湖畔の黒麦酒
火蛾狂ふ場末にロマのフラメンコ
地果てて西日に燃ゆるロカ岬

異国語の飛び交う空港の雑踏、あらゆる欲望をこつた煮にしたようなバザールの活気、街角のカフェテラスに憩う至福の夕暮れ……。あの心躍る夏旅が失われて久しい。だが、「八十歳の壁」を前に、コロナ禍なんぞに立ち竦んではいけない。吾にあれ！ ふたびの夏。

「回顧は未来になすなき老人の閑事業ではない。未来を展望する澆刺たる青年の活事業である」と言う先人の言葉を胸に、回顧を前進に変える新たな挑戦を開始したい。

人はみな旅せむ心鳥渡る 波郷

風 琴

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野 広子

◇初夏の頃（七月号）

先達は二羽の夏蝶阜みち
葉桜や生きてしあらば出合ひあり

鈴木康世

近辺を無理なく歩く事を心掛けて居られる作者。身心の健康を考へての事と思われる。今朝歩きの先達をしてくれるのは、纏れ合いつつ丘の道を、ゆつくり導いてくれる二羽の夏蝶。葉桜の季節となったこの頃、自分の歩んで来た道に、多くの出会いのあった事を改めて想う。今朝の夏蝶もそうであるが、毎日何かしらの出会いがあり、大きな喜びに繋がる。

竿売りの声を背に聞く薄暑かな
扁平の足の重たき青葉冷え
髪洗ひ意気立てなほす夕べかな

確か「竿竹」と言っていたのが、ステンレスの今は「物干し竿」と流して行くが、懐かしい昭和がそこにある。車や電車・バスが行き交い歩かなくなると、土踏ましが無くなり赤子のような足になるらしい。作者は自らを励まし、日々少しでも歩く。重い足に青葉冷えは少し厳しいが、持ち前の根性と努力で脱帽。三句目、髪を洗う。夏は特に汗や埃の影響を受け易く、毎日洗う。シャンプー後の爽快感と言うまでもなく、正に意気立てなおすである。元気が湧いて来る。気品ある憧れの康世様、呉々もご自愛下さい。

◇草茂る（七月号）

大利根を俯瞰してゐる練雲雀
夏の鳶影を大きく悪魔めく

石山かつ子

練雲雀とは、羽毛の抜けかわる夏のヒバリとある。掲句は小さなヒバリが、大利根（加須市）の北東部に位置する自然豊かな地域を舞い昇り見下してゐる。雄大な景である。二句目大空を雄々と舞う鳶。遙か高所から地上の獲物を探す。鋭い爪と眼、そして嘴を持つ。又、羽を広げれば大きく「悪魔めく」は言い得て妙。鳥の眼で地上を眺める。

刈草のどこかに毘がかくされし
夏河原統べて一樹の杜鵑
郭公や川辺は風の湧くところ

刈られた草がそのままになつてゐる。その中には、もしかして毘が仕掛けられているかも知れない。自然を愛する作者の杞憂であればいいが、夏の河原には、涼を求める家族等、種々のグループが楽しむ。が突然「てっぺんかけたか」の鳴き声。一本の樹に潜んで様子を伺っていたのか。一瞬にしてその場の主役となった杜鵑。皆、めったに出会えない場面に感動すら覚える。杜鵑の仲間の郭公。鳴きながら飛んで行くそれにも中々会えない。大利根の自然の中爽やかな夏である。忍耐強く実直な作者。心から信頼する方である。

◇蚩狩（八月号）

島津初花

人声の遠くにありし蚩狩
吾子の手をすり抜けたるや糠蚩

筆者が子供の頃、蚩は夏になれば出現する生き物で、特別の存在ではなかった。その後の開発や環境汚染で、便利と反比例のように、各地から姿が消えた。作者の住む地域は、清らかな水の里。今も昔と変わらず飛ぶ蚩。幻想的な夜の一幕人々の小さな声が遠くに聞こえる。「糠蚩」は初耳。しかし名前から察すれば、小さな蚩であろう。幼子の手囲いをすり抜けてしまう。子供の困惑する景が見えて来る。

墳丘へ浮きつ沈みつ蚩の夜
乱舞して蚩や闇の中へ落つ
残業の父は蚩と戻りけり

盛り土の小高い丘へと向かう蚩「浮きつ沈みつ」が、その生態をよく表している。それは時に、魂の灯火の感も覚える短い命の間に、次の命を宿し繋いで行く。乱舞して更に上へと飛ぶ物、落ちる物、落ちて又飛び始める物。懸命に生きる。働き盛りの父が残業から戻る。人を恐れぬ蚩が、父と共に自宅へ入る。この小さな生き物を、そつと闇へと戻してやる。昔から今まで当り前のように蚩の飛ぶ鳥羽の地。これは、決して当り前ではなく、地域の人々の、弛み無き努力と結束あつての事と敬服する。温好人柄と底力があつてこそ。作者を姉のような存在と勝手に思い、心の灯である。

◇銀座点描（八月号）

境 延昭

紫陽花や一号館の赤煉瓦
片蔭を縫うて銀座のオムライス
寄り道のトラヤで選ぶ夏帽子

「銀座点描」の題の通り、作者は銀座が落ち着くと言う。紫陽花の頃は、しつとりと大人の風情であろう。見慣れた一号館の赤煉瓦は、更に美しい。明治創業の老舗煉瓦亭のオムライス、ハヤシライスは、此処が発祥とされる。バター味のごはんに卵はフワフワ。大人から子供まで大好きな食べ物。他に銀座スイスや資生堂パーラー等がある。

句会の帰路の寄り道、この日は帽子の専門店「トラヤ」へカンカン帽も多種多様。物を選ぶに、数が多すぎると、かえって迷うもの。お気に入りにはみつかりましたでしょうか？

西日中銀座の路地の活版所
手みやげは物産館の芋焼酎

どのような場所にも表と裏がある。日本一ハイセンスな街銀座も、例外ではない。道一本入った所に、昔懐かしい活版所を見つけた。其処には今も地道に暮らす人々が居て、昭和へとタイムスリップしたような心地になる。さて、帰路に着くも、妻への土産かと思えば、芋焼酎とあり、思わず笑ってしまった。否、土産ではなく、手土産とあるので、若ししたら、買って置いた芋焼酎を手に、何方かを訪うのかも知れない。誌上で共に銀ブラをさせて戴いた気分である。何時お会いしてもダンディな作者である。

硯箱

◆季音八月

井口俊晴

緑陰にハイネ詩集を開きをり

永野史代

公園の緑の木陰、長い髪の女性がベンチに腰掛けハイネの詩集を広げている。二羽の鳩が足元で追いかけてくっをしていながら、彼女は気にする様子もない。スマートフォンに夢中になっている人はよく見かけるが、このような「文学少女」は珍しい。つい見とれてしまった。しかもハイネの詩集なのだから……。往年のソプラノ歌手、エリザベート・シユワルツコツプが歌う「歌の翼に」が聞こえてくる気がした。

大甕の青空をゆく緋の目高

山中みどり

庭に据えた古い大甕、水を張ったその中には、十数匹の緋目高が元気に泳ぎ回っている。きょうは久し振りに五月晴れという言葉がぴったりの良い天気。水草が浮く水面には、澄み切った青空がそのまま映っていて、目高がまるで大空を飛ぶ飛行機のように見える。小さな目高のはずだが、なんだか

大きく見えてくるから不思議だ。

不愛想な守宮の奴と暮らしをり

網野月を

守宮が好きだと言う人は、そう多くはないと思うが、筆者は嫌いではない。触りたいとは思わないが、窓ガラスにへばりついているのを見付けた時など、眼や足指の吸盤を、つい可愛いと思ってしまう。蚊などの害虫を捕食してくれるし、守宮が住み着いている家は幸せになるとの言い伝えも聞く。ただ、向こうから擦り寄って来るわけでなし、不愛想には違いない。そんな小さな守宮と一緒に暮らしている作者はきつと優しい人なのだ。

酒蔵に蝙蝠酔ふて逆さ吊り

山田美佐尾

えいほんとう？ 郊外にある酒造メーカーの酒蔵に、一匹の蝙蝠が酔っ払ってぶら下がっているというのだ。誰もが知っているように、蝙蝠は木の枝に止まって休むことはない。羽

をたたみ、頭を下にぶら下がって、作者が言うように「逆さ吊り」状態で休息する。たまたま見かけた場所が酒蔵だったので、ついでに「酔っ払っている」と表現したところが面白い。そう、蝙蝠は昼間から酔っ払うのです。

すずらんや清楚な妻は毒を秘め

福田千春

庭の隅にすずらんがいっぱい花を咲かせた。風が吹くと鳴り出すのではと思うほど、たくさんの白い鈴が緑の葉の中で震えている。この家に住む熟年夫婦は、すずらんの花を毎年楽しみにしていて、とりわけ夫の方は、花にまつわる何か特別な思い出がありそうだ。一方、優しく清楚な妻は、そんな夫の様子を用心深くずっと観察してきた。そのことは一種の毒を秘めているようで、強い毒性を持つすずらんそのものようでもある。

サイダーの噁も久し有馬道

上戸千津子

ハイキングに絶好の季節がやって来た。仲間を誘って、神戸から六甲山を有馬温泉に抜ける有馬道を歩く。ちよつと暑くて汗をかくが、タオルで顔を拭きふき坂道を登り始める。こんな時は、普段あまり飲まない冷えたサイダーが嬉しい。おつと、おくびが出てしまった。ゲップなんて、なんとはし

たない。でも炭酸が胃の中で泡立ってしまったのだから許してほしい。さあ、きょう一日楽しむぞ。

初鯉 遠州灘の器量よし

河野はるみ

青葉の季節は初鯉だと決まっている。得難い旬の味を楽しむため、江戸の昔には「女房を質に入れてでも」と言い出すとんでもない奴が居たとか。青光りするような美しい鯉の姿は、爽やかな初夏にお似合いだ。その中でも、遠州灘の黒潮にもまれた鯉は、頭の前から尻尾まで余分な肉が削げ、すっきりした魚体になっている。お世辞ではなく器量よしなのである。

遠雷や実験台にひかるメス

曲淵徹雄

午後の生物学の教室、遠くの方で雷がごろごろ鳴っている。白衣を着た、どこか神経質そうな若い教師が、これから行う実験について、学生たちに一通りの講義を終えたところだ。教室の隅にある机の上には、これから実験に供される数匹の蛙が、自分の運命も知らず、ガラスの水槽にうずくまっている。実験台には解剖のためのメスが数本、既に念入りに研がれて刃を光らせている。生物実験の序曲なのだろうか、雷の鳴り止む気配はない。

季音雪



落 鮎 菊池 ひろこ

落鮎の流れに雲の影くだけ
落鮎や鯖色きざす床柱
花柄の布地仕舞へり夜の秋
弟と母の近距離線香花火
八月来かつてノイズも玉音も

夏 便り 五明 昇

宿下駄でくぐる茅の輪や旅半ば
石に寝て鳥葬かくや大夏野
滴りに寸時を息じふ歩荷隊
滑走路飛べない蟻が曳く片羽
男日傘が颯爽と行く丸の内

上野駅 境 延昭

爽やかに 島津初花

缶ビール旅の気分の上野駅
縦横に探査の脳や蜘蛛の糸
撫で肩の骨の所在や夏やつれ
読点にふかく息継ぐ今朝の秋
秋立つや線状降水帯の赤

病葉や宝来軒の赤い屋根
鈴虫の鳴き止む刻もありしかな
兄弟の喧嘩治まる守宮かな
颯爽と稜線離る夏の雲
爽やかや校歌のあとの涙に礼

翅のおと 椎野美代子

秋の浜 鈴木康世

夏痩せてベルトの爬虫絡みつく
アボガドの種の色艶夏負けす
ご自愛と結びに記す夏負けて
夏痩せや志功菩薩に見蕩れるる
夏痩せの貝殻骨に翅のおと

秋の浜歩きて若き兄に逢ふ
古き唄つと口をつく秋の浜
秋の浜宿に語らふ友の待つ
穏やかに海鳥遊ぶ秋の海
さざ波の奏づ音聴く夜半の秋

処暑 田寺玲子

相生の 永野史代

白日の防波堤うつ処暑の波
秋立つやロビーの自動ピアノ鳴る
秋暑し浚渫船の曳かれ航く
秋暑し須磨海岸を修道女
朝顔の大鉢並ぶ漁師町

大き門出で放浪癖の蝸牛
思考力なし蠓蠓に入りてより
蠓蠓払ふ一瞬の薄暗がり
更に陰拾ひて歩む白日傘
あなたと入りたき相生の白日傘

八月 十倉和子

原爆忌 西山貴美子

銀翼も巨船も大夕焼のなか
土用波つとよみがへるいくさ歌
決戦の壕掘りし日の馬鹿の花
熊蟬やボリユーム上げて核軍縮
せつせつと防人歌碑へ法師蟬

やや深き辞儀して集ふ原爆忌
秋暑し人差指が我を指す
健啖の父でありしよ瀬祭忌
青北風やゆくらくらと舫ひ船
処暑の風混浴の肩ふれ合ふも

夏あざみ 波多野 寿子

雲 流る 茂木 和子

野に咲いて揺るる艶治な夏あざみ
快走の一両電車青芒
リコーダー吹く子の指や青葉風
青りんご今更若いと言はれても
夏草を刈りすつきりと石灯籠

地下街を出て佛桑花眼に痛し
赤信号見上ぐる天に秋の雲
羊鯖遊ばせ秋の雲流る
開墾地隅に数珠玉一絡げ
走り蕎麦久留米餅の気働き

初 秋 星野 和葉

雲 の 峰 矢作 水尾

地境など知らぬ存ぜぬ茗荷の子
糠床の天地返しや今朝の秋
祖父祖母の故郷遠し秋の雲
ビル群の後楯なる秋の雲
富士を見る坂秋雲の果てしなく

霊峰の水まるやかに走り蕎麦
天窓に流れ込みたる天の川
唳唳たる祭笛が好き港町
野の景となりて日傘の遠ざかる
追ふ白帆逃げきる白帆雲の峰

新 走 山中 みどり

新走紅を残せし升の角
祝歌の訛うれしく新走
盆の月屋形に群るる夜の鷗
夏の果唐棧橋の肌触り
朝顔やラジオ体操皆勤賞

ゆきあひの風 柚木 治子

ほぐれ初む蓄に力牽牛花
ややたく眉引きなほす今朝の秋
天高し生くると誓ふ独り言
忍び入る新秋の陽や青暈
立秋の風のカーテン高架駅

盆 替 り 由良 ゆら女

帰り来て守宮をうかす窓明り
信田妻影絵に妖し夜の秋
恋しさの一句を父母に魂祭
盆棚に旅の名残りの高野槇
盆替りかかるところに由良之介

不順な夏 網野 月を

銀シヤリや清のやうな揚花火
朝顔の捩れやならぬお節介
特撮で壊れたビルや晩夏光
鳴き休む頃合ひ無くも昼の虫
星の橋狼の子は乳を飲む

一部始終 石井喜恵

逢へばすぐふはりと畳む白日傘
川風や小舟に揺るる白日傘
滴りの一部始終をマリア像
滴りやライトアップの鍾乳洞
スカイデッキ今日の別れのソーダ水

汗の染み 石山かつ子

探索の刑事のシャツの汗の染み
太陽を裏返したき極暑かな
交差点渡る極暑の影つれて
水落し来て夜は好演の綾子舞
好一对の連弾ピアノ涼新た

稲の花 大橋廸代

混沌の世を渾身の油蟬
熊蟬や狂ひはじめる我が海馬
熊蟬に消さる画面の独白よ
天鷲絨の風の咲かせる稲の花
水澄むや稚魚集りくる水雪駄

秋の声 大村節代

村落の消えた大地に惆しぐれ
蟬しぐれに負けず唱歌をうたふ母
立秋や折をり丁ちやう決まる水明誌
聞き惚るる黒人靈歌秋暑し
秋暑かな密談しばし取り止むる

常温の酒 小倉倭子

手花火の星屑散らす幼恋
仕掛花火黒子が踊る船の上
群衆の闇の孤独や揚花火
終幕の花火の連打遠ざかる
常温の酒を机上に紫黄の忌

敗戦日 栢尾 さく子

さわがしき背山妹山雁渡し
秋風に頭尾なければ灯を消せり
何時みても頼りなげなる思草
足萎えてより遠くなる草の市
隠れ場のなき晴天よ敗戦日

俳句

11月号
予告

10月25日発売

予価 1040円(本体945円)®

特別作品 一矢島渚男・山下知津子・井上康明

第68回

角川俳句賞 発表!

受賞作 「胡瓜サンド」50句…西生ゆかり

受賞のことは／選考座談会／候補作品15篇

選考委員 仁平勝・対馬康子・小澤實・岸本尚毅

特集 自選力を鍛える …早野和子・淵脇護 藤野武・加藤静夫・安倍真理子・月野ほほな 池田瑠那・西村麒麟

特別寄稿 俳人・稲畑汀子 …………… 岩岡中正

俳句甲子園特別レポート

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖冬

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音月

白桃 大場順子

滴りや苔青々と神の岩
 滴りを受けて輝く生命線
 少年の瞳に少女野紺菊
 白桃や胸ゆたかなる観世音
 喜寿なほも多感なる日々水蜜桃

法師蟬 山田美佐尾

法師蟬その一生を鳴き通す
 貝塚の貝累累と天の川
 森を出て白壁の館カンナ燃ゆ
 住みなれし庭の片隅カナの緋
 滴りを片手で掬ふ山女

新秋 高島寛治

夏瘦せや祖母が好みし紺緋
 滴りのためらひ落つる間合かな
 悲しみを忘れさせたる蟬時雨
 新米に嘘の近況少し添へ
 新秋の日差し射し込む奥座敷

小浜線界限 鳥羽和風

虫の秋枯山水に椅子一つ
 秋茄子一つ残して子に挽がす
 池換へて水のさやけし鯉の髭
 秋茄子のずんぐりむつくり小浜線
 野分雲軽トラで来る刃物売

八十路の妻 井上燈女

草分けの女医の碑なりき百日紅
 看取り終へ八十路の妻の盆厨
 袈裟懸けに闇を引き裂く稲光
 秋蟬の律義に鳴きて力尽く
 角帯を粹にずらして盆踊

星月夜 梅澤 佐江

天心にいま精魂の揚花火
好漢の主治医の所見秋涼し
探查機の小石にロマン星月夜
底紅のよそ目さびしき夕まぐれ
ちりぬるは無常の美学白木槿

チヨコバナナ 内田 恵子

滴りや鳥居をぬけて神の山
夏痩せて端然と座す奥座敷
黒南風や伸び過ぎてくる髪と爪
かたつむり重荷となりしマイホーム
いかめしき祖父と夜店のチヨコバナナ

沼めぐり 松井 由紀子

滴りや行雲高き峡の里
石を蹴りつつ帰る少年夏の果
夏痩せや身幅のゆるきニューモード
禍ごとの大書ゴシック秋暑し
秋風とすれ違ひたり沼めぐり

華の妙薬 森川 義子

暮れなづむ刻の静寂法師蟬
沸き立つ勢ひ雑木山から法師蟬
人探すナース小走り夜の秋
おしやべりは華の妙薬心太
寄る年のふる里遠し天の川

花火明かり 丸山 マスミ

手花火の明かりの作る家族の輪
突出しは坊守手製のはじき豆
蚕豆剥く話の弾む夕厨
退屈なんぞ吾に縁なしかたつむり
秋簾古書音読の声漏るる

鈴虫の…… 森本 早苗

鈴虫の「里親募集」貼るロビー
鈴虫の十数匹を預かりぬ
鈴虫の初鳴きを待つじつと待つ
赤蜻蛉カリンバ弾く姉いもと
爽やかやセーラー服のジャズバンド

身に入む 藤澤喜久

身に入むや命の骨が軋みをり
先づ生死確かめ合うて秋彼岸
足湯して修善寺に聴く法師蟬
苦界の慈悲「ハマ」のメリーさん偲ぶ秋
無心に鳴く虫に無心を預けたり

初月夜 池田雅夫

欄干に凭るる乙女初月夜
花野道今さらできぬ後もどり
爽やかに吹きにこやかに戦ぐ風
露草の道にしよんぼり石仏
秋の蝶紆余曲折の人の道

秋の雲 井口俊晴

天渺渺武蔵の国の秋の雲
俺達は江戸つ子の裔走り蕎麦
筒持てば火焰放射の花火かな
午後六時テレビにつられビール飲む
西日浴びいつの間やら古畳

たなごころ 荒井俱子

昼寝子の微かにひらく掌
昼寝する長押の父母に見守られ
秋扇たたみ聞き入る法話かな
胎の子が蹴つてゐるよと桃を食む
桃を剥く桃のかたちに指を添へ

ひからかさ 町野広子

八重一重梔子かほる深き闇
蚯蚓乾ぶへの字くの字に身を折りて
でむしを踏みさうになる遊歩道
子より先渋谷に着きてひからかさ
絵日傘を目印に母見つけたり

「し」の字 渡辺舍人

遂にコールドゲーム原爆忌の黙祷中
取り敢へず日傘の男に蹤いていく
水を嚙む酷暑の昼の日を仰ぎ
気の炎ゆるお城熱りの鍵の手路
「し」の脇がさびしと云ふ子秋に入る

風 鈴 松宮保人

さまざまな音色奏づる風鈴屋
柵越えのポールを追へば八重葎
真夜中の水分補給や冷蔵庫
貪りし乳房流るる玉の汗
どよめくや軋みて廻る鉾囃子

天の川 井上玲子

地底湖は神の存念滴りぬ
洞窟の滴り青く息づけり
点点と漁火沖を天の川
夕づきて余情をかもす法師蟬
チエロを聴くしづごころなる秋の夜

ウルトラマンの影 正木萬蝶

服薬の後の一口水蜜桃
白桃を剥くや忽ち桃源郷
桃沈めても晩節の恋浮き上がる
病床の窓越しに聞く遠花火
揚花火掠めウルトラマンの影

漁火 上戸千津子

漁火の見ゆる故里盆の月
稲妻にモダンな窓が洋画めく
朝霧やネッシー出さう千丈寺湖
名に憶え「もしや」葉月の甲子園
故里破れ虫も鳴き出す甲子園

秋暑し 川崎道子

秋暑し時計の鳩が戻らない
秋暑し墓前の水を飲む雀
宿浴衣外湯へむかふ下駄かるし
敗戦日和服で通す父なりし
鯛や慶事の準備ととのへり

孀恋の気 福田千春

火の粉浴ぶ手筒花火の心意気
大花火ひらき恋人闇に浮く
下腹にずしんと余韻大花火
蠖蠖や払へど残る過去の嘘
キャベツ割る孀恋の気が吹き出しぬ

盆の僧 松山清子

敷石の反射に怯む墓参
ひさびさのうから集ひて盂蘭盆会
檀家にて熱き茶求む盆の僧
客去りてひとりの座敷つくづくし
尼寺に溢れむばかり萩の花

終戦日 野口和子

夏逝くや川に片方スニーカー
終戦日馬上の父はセピア色
庭プール街住みの子等待つばかり
傷少し米寿の姉の西瓜かな
盆の鐘三々五々と寺の道

遠花火 西浦千枝子

嫌な記憶消しても消えぬ遠花火
白桔梗亡夫の作りし文机に
視力検査に兄が耳うち夏休み
佛前の供物に興味茄子の馬
髪染めず偽りなき身の盆用意

特集

今こそ「社会性俳句」

日野百草／安里琉太／飯田史朗
小田島渚／角谷昌子／駒木根淳子
中村安伸／西村麒麟／橋本直
堀切克洋／水野真由美

◎巻頭三句

片山由美子

星野高士

梶原美邦

名村早智子

中村姫路

河瀬俊彦

◎今月の華

佐怒賀由美子

降旗牛朗

◎俳句と短歌の10作競詠

吉田林檎

宇田川寛之

◎好評連載

南伸坊

筑紫磐井

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

てのひらの江戸
― 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ
二ノ宮一雄

一望百里



Haiku Shiki

2022年11月号

10月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音花

友好

近藤徹平

友好は微笑と打算白木槿
街角や探す真昼の片かげり
大土手に訛とりどり大花火
雲海や水場を探す縦走路
孟蘭盆会今やセピアの好々爺

爽やか

大塚茂子

さやけしや浅き流れの奥秩父
爽やかに踊る芸子の白虎隊
洞昌院細き参道萩零る
秋めきて洗ふ野菜の生き生きと
子規庵の辛苦は遠しへちま棚

秋めく

青木鶴城

告白のメールに「既読」夜の秋
秋の蟬さすらひ人の歌ふ唄
秋澄むや意外に長き頭脳線
天と地の夜の綱引きいなつるび
争ひは他人事蛇穴に入る

処暑の候

日高道を

カンナ立つ監視カメラの作動中
母見舞ふ手紙の滲み処暑の夜
処暑の雨子供らを待つ分教場
いなつるび廊下の奥に夜叉の面
稲妻や腕のタトウが動き出す

八月を生きる

石田慶子

ほろ酔ひの父の合図の庭花火
まくなぎや赤いネイルの手が泳ぐ
まくなぎを払ひて晴るる憂さもあり
遠雷や戻らぬ人を待つよふけ
黙祷のエプロンの染み広島忌

夏惜しむ 河野 はるみ

迫り来る雲の峰峰真白しろ
ひまはりや黒き瞳の奥そこに
被爆者の朗読劇や今朝の秋
法師蟬鳴きつくしてや裏返り
手水鉢より覗く小魚天の川

秋の雷 野田 静香

脳外科に緊張走る秋の雷
滑り込む列車を待つや霧時雨
ロボットに近づく闇やいぼむしり
新涼や瘡蓋剥がれ膝に風
かなかなやローカル線の紙切符

風の盆 熊倉 千重子

胡弓の音に踊る編笠夜半の秋
あさがほの紺の深きに心澄み
朝顔の絞り解けて朝刊来
組体操天辺決むる子秋高し
鮎落ちて辺りの山は色づきを

虫の闇 石川 理恵

遠雷が聞こえぬ夫と夕餉かな
「二十四の瞳」再読終戦日
いづこより赤子泣く声虫の夜
十回鳴き九拍休む鉦叩
終バスを逃してしまふ虫の闇

沼に雲 曲淵 徹雄

白鷺の白きを濯ぐ青田波
燃えきらぬ恋の山坂道をしへ
操りの糸切るごとと止む噴水
噴水の止んで生まるる沼の色
夏雲の高きを深く映す沼

筆忠実 保坂 翔太

南吹く巖流島の潮速し
四万十の鰻を捌くいごつそう
筆忠実に恋の気配や合歡の花
銭湯の気高き富士や暑き夕
楽車や四角四面の勇み肌

秋めく

原田 秀子

秋めくや手にしつくりと阿あ六ろく櫛くし
ゆく夏をかみしめて居りみすず館
かなかなや宿坊できく四重奏
演奏会の録画たのしむ処暑の夕
爽やかにカウベル鳴らし牧の朝

秋気澄む

宮崎 紫水

女生徒の礼深々と秋気澄む
点検のノート山積み秋の昼
病める子のなき保健室秋麗ら
月の出を待つかかな教師残業す
教へ子の顔行き来して夜長かな

虫の音

宮崎 チアキ

勝手を知らず姉の介護や今朝の秋
句読点を無視の歌声星月夜
美しき文字の手紙届くや藍の花
今生の別れの声か秋の蟬
虫の音の永久に続かんこの大地

盆の月

野平 美紗子

戦死の父思ひて仰ぐ盆の月
父母亡くも帰る故郷盆の月
朝顔の素顔を見たる朝の庭
青空に火を噴くごとし百日紅
夏雲と釣り船映す琵琶湖の面

稲刈り

飛永 鼓

爽やかや袖口通す野良の風
手拭をひらりと落とす風さやか
爽やかに顔いつぱいの笑顔かな
蔓の先伸びたる先のさやかかな
稲刈りの笑顔の真ん中薬缶かな

竹人形

檜鼻 ことは

窓の無き部屋に風鈴吊しけり
充電と言ふ名の休暇晩夏光
腰据ゑて常温で飲むビール通
こつそりと土用鰻の見舞客
七夕や竹人形の細面

秋 扇

笹本啓子

あさがほ蔓を奔放に巻くみぎひだり
僧庵に幽かな明り盆の月
川下るエイトの声や涼新た
「押さないで」桃の小さな叫びです
然りげなく切り出す話 秋扇

蓮の花

田中章嘉

明の空風が目覚めに蓮開花
蓮の花仏来るよな昼の池
蓮の糸紡ぎ織り成す天女かな
虫干しに衣裳二間を占居して
通り雨涼呼ぶほどに降りもせず

花屋敷

下川光子

地下鉄の天井低き残暑かな
地下道の雑多な臭ひ秋暑し
牙見せて剥製さびし残暑かな
花やしき飛ばす残暑のジェットコースター
秋暑し路地を彩る花やしき

念佛婆

松島寛久

念佛婆一生に悔なし彼岸花
団塊の胸に風鈴の風が吹く
雷鳥や山小屋の灯に葉書かく
大男口も重たき夏場所
雷鳥の人間界越え天へ鳴く

虫時雨

瀬戸雄二郎

表札は男名のまま虫時雨
抜き足で階段虫の声びたり
死し蟻を蟻が運べり人も又
朝顔の小粒になりし空家かな
庭荒れて朝顔松の上に咲く

今朝の秋

葛城千世子

ケアマネより緊急連絡今朝の秋
立秋のエアベッドや微熱の母
秋の雲どどんどどんと不整脈
何本も血液採られ今朝の秋
処暑の胸重くないかとエコー技師

山百合 中野 彊

驟雨来る 觀光船は進むのみ
夏豪雨橋も住家も流さるる
箱根路よ山百合灯し湖静か
あぢさるよ箱根無人の閑所かな
診察を待つ雷鳴をききながら

秋近し 後藤綾子

秋近し遙かに見ゆる黒き富士
遠き地震かすかにゆるる夾竹桃
蚕豆を茹づる匂の安けさよ
出航の汽笛がひびく秋近隣
ミュージカルの余韻離れぬ夏休み

☆ ☆

特集 今、読み直す耕衣・綾子・静塔・五千石

特別企画 おくのほそ道333年、その地に遊ぶ(前篇)

巻頭作品10句

池田澄子・大久保白村・川嶋一美
田中貞雄・遠山陽子・千葉皓史
西宮舞・林桂

俳壇 11月号
10月14日発売 定価900円(税込)
巻頭エッセイ 鳥居真里子
八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句(第Ⅲ期) 亀井雉子男・笹瀬節子

色の歳時記…………… 黛まどか
俳句文法…………… 井上泰至
そこがポイント……………

連載 俳句史を見直す…………… 秋尾 敏

ものがたりのある俳句…………… 四ツ谷 龍
先人のことば…………… 中西夕紀
十二か月添削教室…………… 小林貴子

俳句と随想12か月 河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

『水明誌』を繙く（水明八月号）

中西夕紀（「都市」主宰）

植えて三年 露の茂りや庭の色 矢作水尾

農家の広い庭の一角に、露の株を植えて自家用の露畑としたのだろう。その露も三年たつて見事な繁茂をなし、庭の中で一番の勢力を誇っているというのである。

露と言えば、春は露の臺の天ぶらや露味噌がたのしみである。夏は茎の煮物や葉の佃煮が美味しい。秋になって茎が筋っぽくなったら、佃煮のきやらぶきにして保存する。

このように一年中楽しめる便利な食材だから、庭に植えている農家が多い。

「植えて三年」という出だしが軽妙で、まるで講師師の口調のようだ。句の中に引き込まれるように読んでいくと、「露の茂りや」と軽い中七の「や」切れとなる。この「や」は意味を切るといふより、句の調子を付ける役目をしているもので、取り合せの句というわけではない。下五は露の茂りの色を庭いっばいに広々と見せている。

歌うような滑らかさで姿の良い句である。俳句は意味で作るものではないことを認識させられる。何回か口遊んでいるうちに覚えてしまった。

母の嘘 その母の嘘 徴けむり 正木萬蝶

代々引き継がれて行つた嘘というものが旧家にはあつたようだ。大きな家の主婦であつた祖母と母。家にまつわる言い伝えがあつたのである。従順な祖母と母は不思議とは思いつながら、或いは家のためにそのままその嘘を伝承した。

しかし、作者はそれが嘘であることに気づいてしまったのである。家を存続させる必要もなくなった現状が明らかにしたものか。戦後の民主化が代々続く家というものを崩壊した。長子や女性が家に縛られなくなったことは大きい。

蔵の中には、長年開きもせず眠っている箱が徴て煙っている。母たちは中身も確かめずに、その箱を後生大事に守つてきたのだ。作者は母たちの守つてきた嘘は、その箱同様に無用で徴が生えて煙がたつていると看破している。

この句の下五の季語の置かれ方が抜群にいいと思う。徴が物理的な徴から、因習の馬鹿らしさを表す社会的な比喩へと広がっている。読み終わつて句の内容の深さにしばらく瞠目させられた。女性の眼から見た母たちの価値観と、現代人である作者の価値観のずれが凝縮して描かれている。

現代俳句鑑賞

網野月を

膏葉のごとく八月いつも背に

仲 寒蟬

〔俳句四季〕 8月号・八月の影より

日本人にとって「八月」は特別な月である。「背に」負うた何かを、何処かで「いつも」意識していて、疼いているので「膏葉」が必要なのである。人としての謙虚さを失わないための良薬なのかも知れない。措辞の選択も配置もこれ以外には無く、饒舌でもないし、不足でもない。この句の「八月」の季語は特殊な働きをしているように思える。

真鍮の飾り涼しき古ピアノ

井上弘美

〔俳句四季〕 8月号・洗膾より

大方は白と黒で成立しているピアノに僅かにくすんだ金色にひかる「真鍮の飾り」を見出したのである。壁に寄せられたアップライトの「古ピアノ」は、威厳に満ちていて何処となく寂しげでもある。その孤高の佇まいを「涼しき」に譬えている。一句仕立てで「古ピアノ」の存在感をも引き出している。他に「外海の闇のさらなる洗膾かな」がある。

かさぶたの如くにこれも茸なり

岸本尚毅

〔俳句界〕 8月号・自選30句より

掲出された三十句はいずれも刺激的な句ばかりである。読み込むほどに句意の深さと広さ、表現の巧みさ、リズムの端正さなどを勉強することになる。嘗ての作者の代表句を掲出せずに比較的新しい句を自選されたのである。機会を得て三十句すべてを鑑賞して頂きたい。他に「顔焦げしこの鯛焼に消費税」がある。

水打つて石の素顔を確かむる

千田百里

〔俳句界〕 8月号・我もまだまだより

真摯に俳句に取り組み続けると、このような句が出来るようになるのである。道先をお示しいただいているような気がする。境地に至って句が出来るのか、句作を錬磨することと境地に至るのか、作者にご教示頂きたいものである。

心太あたり障りのない母音

栗原かつ代

〔俳誌『山河』第377号・鼈甲館より〕

母音というものは「あたり障りのない」ものなのである。もしかしたら上五の季語「心太」のオ音とエ音が「あたり障りのない」母音の連続であると読む可能性もあるのだが、そうではないだろう。「あたり障りのない」のは子音に対する母音の響きであろうと解しない。「あたり障りのない」ことは「心太」の様態そのものであって、突き出される時のスムーズさや食する時の滑らかさと解したいのである。

早寝早起き夏至の太陽使い切る

(俳誌『鷗座』8月号・葉指より)

小高沙羅

日本の標準時は一年間を通してのそれで、サマータイムを用いることがない。その分夏季の朝は早い。夕暮れ時の日が伸びた感覚よりも明け方の早さの方が勝っている。子午線よりも東側に位置している東京では尚更であろう。生活感として実感することであるが、「太陽を使い切る」の措辞の大胆さに魅かれる句である。作者の竹を割ったようなご性格を想像する。

開き癖つきしノートや修司の忌

(俳誌『都市』8月号・森涼しより)

中西夕紀

「修司の忌」は五月四日である。来年、没後四十年忌を迎える。『新版角川俳句大歳時記春』にも収録されている季語である。「開き癖つきしノート」は修司に関して勉強したものであるだろうか、それとも作者の青春のノートであろうか。特に数か所だけ「開き癖」が付いているのである。中七の切れ字「……や」が絶妙である。他に「叩け叩け太鼓叩けよ森涼し」がある。

桃一つ食みて罪負ふここちかな

(俳誌『秋麗』8月号・おほむらさきより)

藤田直子

禁断の木の実は「桃」なのである。皮をむいた桃を丸ごと手に取って食べる時の感覚を思い出すのである。他に「色秘むるおほむらさきの蛹かな」がある。

白日傘移動販売車の列へ

(俳誌『小熊座』8月号・海嶺集より)

佐川盟子

上五の季語「白日傘」が効いている。「移動販売車」との少しばかりのズレが感じられていて、現代を活写しているようである。座五の「……列へ」の叙法も素晴らしい。

豆の花双子似たまま老いゆけり

(俳誌『青山俳句工場05』8月号・第百三回より)

小野裕三

本俳誌の句評では「おそらくおばあちゃんでしょうね。豆の花で、可愛い幼顔が残る二人の表情が目に浮かびます」とあります。やはり上五の季語「豆の花」の幹旋が秀逸だからでしょう。筆者はどうしても《情熱の砂漠》の世代なので、連想がそちらへ行ってしまう。

自販機の三台並びどれも春燈

(俳誌『蠶』8月号・城下より)

九里順子

夜の闇がなくなつた現代の、その大本はこの自販機が存在が少なくないのである。ただし、掲句ではその自販機も「春燈」としている。明るさ、のびやかさ、華やきのイメージよりも隴夜の滲んだような景を連想させている。他に「巻貝の夢の跡なる春の夕」がある。

新同人紹介

— 令和4年 —



秋谷風舎

水明入会 令和二年
所属句会 蛸蚪の会 繭の会

結界を切り裂く初音三輪の杜

細尾根や手招き小さき花馬酔木

裏山の人見知りせぬ夏の猪

喉越しの北の大地や走りそば

河豚刺しの透けし有田の絵皿かな

伝統ある水明俳句会の末席に加えていただきありがとうございます。ございます。奈良好きで、関西の食べ物好きです。これらの気持ちを俳句に表したいと、目指しています。なかなかままなりません。いつか、目指す句が詠めるよう、精進してまいります。山好き車好きで、江戸前そばも好きです。ご指導よろしく願いたします。



池田 珪子

水明入会 令和二年
所属句会 皐月の会 繭の会

神父弾くカリオンの音や春夕焼
楽聖の墓に枯たる花ミモザ
夕立や楽器ケースに銭わづか
梅雨じめり工事現場の行程表
塗りたてのボートのペンキ海開

この度は同人に御推挙頂き有難うございました。俳句に
関しまして何の見識もなかった私を御指導下さいました鬼
之介先生、月を先生、句友の皆様には厚く御礼を申し上げます。
遅々とした歩みでございますが弛まぬ精進を心掛けたい
と存じております。
どうぞ宜しく御願致します。



奥山 粉雪

水明入会 令和三年
所属句会 繭の会

梔子やうす暗がりの八重の白
炎昼や虫は動かず人も動かず
凌霄花お手玉みたいに落花する
留守の間にうす紫の百日紅
これくらいいやもつとだよ大暑なり

私は七十歳を機に「これからは自分の心の赴くままに」
と決めました。それが俳句にも表われ自由気ままかもしれ
ませんが、それもこれも自分であり個性と捉え、酸欠の金
魚のようにアップアップしながら俳海を泳いで行きたいと
思います。同人の御推挙をいただきありがとうございます
た。



篠崎紀子

水明入会 令和二年
所属句会 皐月の会

嬉しさが箸につたはる栗の飯
名月についつい窓を開け放し
残菊や風吹くままに生きたりや
地虫鳴く夜へ手紙が長くなる
喪服脱ぐ骨の割れたる桐一葉

主宰より「同人に推薦します。」と言うお言葉を頂いた時、正直、驚きと喜びと不安が脳裏を駆け巡りました。同人として水明が良き時も悪しき時も、共有せねばなりません。

まず、作品、行事への参加、経済的：等の責務を果たせるかどうか、同意した以上出来得る限り頑張り、まずは作句に努力したいと思います。



畑宮栄子

水明入会 平成十七年
所属句会 横浜ミモザの会

桜散るなにごともなく桜散る
指先の邪心にささる茄子の棘
父母よりも祖父母の多し運動会
炎天下サッカー少年仁王立ち
花筏淀みの先は崖つぷち

この度は同人に推挙いただきありがとうございます。これ迄は楽しくゆっくり俳句に向き合ってきましたが、これからもう少し真剣にとりくみなさいとネジを巻かれたようです。

日々の暮らしの中で感じたことを大切に、句友の力をお借りして、自分なりの表現ができるように願っています。



丸屋 詠子

水明入会 平成二十六年
所属句会 なし

うららかや白磁の白の限りなし
御簾越しになほ美しき夏木立
天折の画家の絵に会ふ秋の昼
水分まりの神かみは川路を神の旅
凄まじき碧はつゆめの月の色

このたびは、水明俳句会同人にお迎えいただきまして、
どうもありがとうございます。
歴史ある水明俳句会に関わらせていただけている御縁に
心から感謝致します。これからもたくさんのことを学ばせ
ていただき、俳句を楽しんでいきたいと思えます。山本鬼
之介主宰、皆様、今後ともどうぞよろしく御願い申し上げ
ます。



元田 亮一

水明入会 令和三年
所属句会 第一例会 若鮎句会
円卓の会

何もかもリセットされる秋の朝
蟪蛄を助ける空の青さかな
初風や縁側のなき昼下がり
故郷の雨秋となり離れをり
秋雨やわかば・エコーの多い町

HPで水明の存在を知り、若鮎句会に参加させていただ
きました。今では、第一例会、円卓の会にも加わり、主宰
月を先生のご指導の下、楽しく学んでいます。俳句は人口
が広く、奥が深いと聞きました。今、その言葉を実感して
おります。この度の同人推挙を励みに一層精進する所存で
す。どうぞよろしく御願いいたします。



森 美枝子

水明入会 令和三年
所属句会 コクーンシテイカル
チャーター俳句教室

早春の漣に小舟の耀へり
つまべにを褒めて手渡す回覧板
三線に酔へる島人鳳仙花
抗打の重機とよもす芒原
葱植うる節くれだちし母の指

この度は、同人にお迎えいただき誠にありがとうございます。ご
ました。
毎回季節先取りの季語に触れているうちに一年が瞬く間
に過ぎてしまいました。
同人となり投句の数も増え、日々の暮らしを大切にしま
なくてはならないと思っております。今後ともご指導宜しく
お願い致します。



山岸久美子

水明入会 令和二年
所属句会 たかな俳句会
俳句の手ほどき

夏風や木漏れ日の川石うたふ
キャンプ夜の宝探しは湧きに湧く
しだり尾を流しつ消ゆる夕の虹
北窓に夏草伸ぶるガラス絵に
万雷の拍手華やぐ夏舞台

この度は同人に推挙いただきありがとうございます。水
明という大海に乗り出し数年の月日が経ちました。知らな
いこと、わからない事が沢山あります。句会での皆さんと
の学びが楽しいです。鬼之介先生のご指導にはいつも目が
開かされています。これからもどうぞよろしくご指導をお
願ひいたします。



山下ユリ子

水明入会 平成十二年
所属句会 花ごよみ句会

二の膳は菊脰より箸をつけ
口論に背中で応へ秋刀魚焼く
吾に似し羅漢に一つ木の実置く
信濃路や石佛かくす稲架の波
冷やかや指先欠けし阿修羅像

平成十年の「いきがい大学」ではじめて俳句に出会う。
指導いただいた先生が「水明」に所属していらしたため
「第十三水明抄」より掲載していただく。俳句に出会って
以来道端の草花、頭上の樹々にも眼をそそぎ、楽しい毎日
を過ごしている。



角川俳句 大歳時記 春
角川俳句 大歳時記 夏
角川俳句 大歳時記 秋
角川俳句 大歳時記 冬

新版
角川俳句大歳時記

春・夏・秋・冬・新年 各巻定価 5,995円

角川書店編 茨木和生／宇多喜代子／片山由美子
高野ムツオ／長谷川耀／堀切実 編集委員

2022年 8月31日 『秋』刊行

特設サイトはこちら!



size. 月刊誌『俳句』とほぼ同じ大きさ!
厚さは約4cm A5判/上製/函入 約700~800頁(予定)

本書の特色
見出し・傍題合わせて1万8000季語以上。
例句は旧版から大幅に刷新。
5万句超を収録。
【既刊】『春』2022年2月/『夏』2022年5月
【刊行予定】『秋』2022年8月31日/『冬』2022年11月/『新年』2022年12月

KADOKAWA KADOKAWA公式サイト <https://www.kadokawa.co.jp/>

発行 株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 『大歳時記』編集室 050-1744-2828

俳誌望見 梅澤佐江

〔鶴〕 令和四年七月号 通卷九二五号

主宰 鈴木しげを 発行所 東京都国分寺市

昭和一二年九月、石田波郷が東京で創刊。師系水原秋桜子。古典と競い立つ、現代に生きる打坐即刻の韻文精神。「月刊」

主宰詠「春興」 一二句より

忽々「花も過ぎしよ 西行忌

待ち侘びた桜も慌しく盛りを過ぎてしまったなあと、散つてしまった桜への愛惜を感じている作者。日本人は古来より桜の美しさ、可憐さに心惹かれ、また春の訪れを告げる神や精霊が宿る存在と考えられたり、儚く散つてゆく命の短さから死生観を考えたりする対象となつて来た。桜に一生の時間を重ねた西行、芭蕉の敬慕した歌人として「西行忌」の季語は深い感慨を導く。

野遊びをかねて故山に集ふとや

暖かい春の日を浴びて、日常の生活から開放され故郷の野山で、うから・はらからと一時を楽しもうとか言うことらしい。土筆や蓬を摘んで、土筆御飯やお浸し、蓬餅等と懐しい味が思い出される。「故山」の措辞が故郷へと誘う。

三句目からは京都で開催された同人総会の折の吟行句。

春興の懐紙の表かへしけり

茶会、茶事の何れかに参加されたご様子、お隣からの菓子鉢を縁外に置き、懐紙を出し、重ねて二つ折にしてある懐紙の向こう側の一枚を手前に返して、わさを自分側に向けて置

くという端正な所作を詠まれている。茶道に精通した佇まいと心持が見えてくる。

春暮るるみかへり阿弥陀拝しては

「見返り阿弥陀」として知られる永観堂禅林寺の本尊像。僧の永観に纏わる様々な言い伝えはあるが、真正面から人々の心を受け止めても尚、正面に回れない人々のことを案じて見返らずには居られない阿弥陀仏の御心。戦いの終結を祈り乍ら拝みつつ春も終りに近づいている事を沁み沁みと思わずにはいられない作者。「春暮るる」が余情を深める。

春障子写経の眉の見ゆるかな

開け放たれて春の柔らかな陽の差し込む部屋で、一心に写経をする柳眉の女性が見える。おそらく京都御所の東に隣接する廬山寺、紫式部邸宅跡として風情ある寺である。「春障子」の季語と「眉」の措辞が嫺やかな女性を想起させる。一瞬、平安時代にワープして紫式部の幻を見たような。

飛鳥集 五一名 各六句より

口開けの地酒たまはる 春祭 五十嵐元克

東入ル 西入ル 京の初つばめ 谷 ゆう子

小気味よき 鉄の音や 夏はじめ 西村貴美子

栗羽集 四六名 各五句より

水ゆるく 流れ 東寺の花筏 深津利江子

花の雨 舳を 解きし 渡しかな 武藤 勇

清明の 赤子の 軽き 寝息かな 坂野道子

鶴俳句 主宰選 一五五名 各五句より

酒断ちの 神の 徳利や 山笑ふ 藤原佳代子

産土の その 後を 知らず 蓬餅 宮城 新

うららかや 寧楽の 町家の 魔除け 猿 伊奈 治

韻文精神で人間を詠んだ作品群を堪能させて頂きました。

山本 鬼之介 選

夏
季
競
詠

兼
題



〔金魚〕 傍題可

〔虹〕 傍題可

〔石〕 (詠み込み)

油照り修羅曳く声す石舞台
蠟石の線路どこまで日向水
天空も遊びせむとや二重虹
虹の端をこぼれて一羽夕雀
金魚の尾舞台の夢のよみがへる

大 阪 由良ゆら女

緑蔭に石割る鑿の火を放つ
緑蔭に箱根古道の石畳
きららなる天守の鯨に夕虹す
二重虹伊豆の山々東ねけり
美容院鏡の中の金魚かな

川 口 矢作水尾

蘭鑄は男ざかりを虜にす
薬浴の貼り紙しんと黒出目金
朝の虹門重き御成門
ひたと止むダムの放水二重虹
墨痕涼し母が一句を青石に

和歌山 大橋 旭代

金魚浮き庭に小石を一つ置く
今更の願ひを虹の消えぬ間に
朝涼の四阿にある石の椅子
虹の根や余熱をさます登り窯
繰り言の一部始終を出目金に

さいたま 境 延昭

蜥蜴去る杳脱ぎ石に青のこし
落石注意命綱しかと裏妙義
金魚掬ふ子よりも親が真剣に
鉄工場の汚れし顔のまま夕虹
虹二重神の域へと及びをり

横 浜 永野史代

白山を背に百万石の大青田
行宮の古き石組著莪の花
虹消えて現に返る三保の浜
金魚にも泡粒ほどの悩み事
打水や石堀小路に暮の鐘

さいたま 五明 昇

虹仰ぐ水禍の農夫手を合はせ
片脚を大河に浸し虹の橋
琉金の鱗の動きを見て飽かず
撫でてやることも出来ずに金魚死す
腰下ろす石に余熱や花火待つ

上 尾 横山君夫

ほどほどの暮らしが好きで金魚飼ふ
目を開けて眠る金魚や朝ぼらけ
新入りを宥める古参金魚の水
夕の虹目を離す間に消え失せる
清正の腰掛石や夏湯治

網野月を

告白は立ちたる虹の消えぬ間に
虹消えて行き交ふ人も掻き消ゆる
ウインクのやうな出目金境界に
客を待つおかみ金魚にぐち話
生き延びよと金魚を放つ心字池

さいたま 大村節代

待針を数へて仕舞ふ虹夕べ
鏡の中に虹のひとはけ美容院
列島の形に石置く庭涼し
水替へて散華おもほゆ金魚かな
大空へ飛び出すつもり金魚跳ぬ

柚木治子

金魚太り波風たてず人嫌ひ
一頭といふ蝶の重さや石の上
東京を一跨ぎして虹かかる
棟梁の女房といふ朝の虹
石垣を攻むるつもり山の蟻

石山かつ子

虹立ちて人工島を抱へ込む
旅ゆけば酒旅ゆけば虹二重
つつましく祈る二重の虹なれば
談笑を離れて琉金の尾鱗
パラスルを廻し石碑の象形文字

椎野美代子

独り寝の夜はオランダ獅子頭

さいたま 洪谷きいち

夕虹やおふくろの味煮染たく

虹消えて明日は奥穂のジャンダラム

小石ける母を施設へ遠花火

ほろびても尚石垣に苔の花

口ばくのバックコーラス獅子頭

横浜 正木萬蝶

石を語る「タモリ」の笑顔夏の雲

陸言を吐くたび泡を錦蘭子

夜の金魚いつか人魚になる夢を

銀座闊歩のペディキュア五色虹立ちぬ

数寄屋橋傘閉ち虹を見上ぐるよ

さいたま 小林京子

信号の変はるまで人虹仰ぐ

敷石に刹那止まるや拵蝶

日の射して薄き影曳く金魚かな

琉金の尾ひれの余韻渦ゆるり

虹立つやあれはミュージズの渡る橋

染谷正信

これしきの石段に杖松落葉

袖押さへ金魚を掬ふ二十歳かな

虹立ちてグリム童話を二つ三つ

天灼くるニコライ堂の石の壁

発破音ひびく炎暑の石切場

明石 田寺玲子

虹立つや平家敗れし海原に

金魚下げ石塀小路行く舞妓

湾またぐ虹の両脚鮮明に

西日濃き明石大門を貨物船

濃紫陽花水明磐石九十年

さいたま 石井喜恵

君下りて来よ虹の橋消えぬ間に

一目惚れの金魚を掬ふ吐息かな

アリバイは金魚のみ知る昼下り

医者の背と対話五分や金魚鉢

琉金や娘盛りの身のこなし

若狭 鳥羽和風

あわぶくに破る金魚の黙秘権

守護石に寺の風格山法師

飛魚やいつきに飛べよ沖の石

大川に虹を流して陽を残す

山瀬風苔のむしたる津浪石

行田 近藤徹平

片脚は忠治の山にかかる虹

石棒祀る故郷の社夏祭

水換へは扶養者義務ぞ金魚跳ね

三尺寝月の石蹴りけんけんば

鍵つ子のテーブルに置く金魚かな

若狭 檜鼻ことは

東京 菊池ひろこ

金魚買ふ単身赴任の一日目

灯ともせば金魚と目の合ふ旅の後

虹立つや歩けば虹の遠ざかる

朝虹や伏流多き父祖の土地

虹立つや上棟式の槌の音

朝虹の下翳りゆく風見鶏

汗の子や集ひし辻の力石

白日傘出てはまた入る庭石店

夕虹と握手してゐる象の鼻

鴻巣 大塚茂子

さいたま 保坂翔太

虹生まれ武甲迫り上ぐ里景色

出目金の三千世界鉢の中

城壁の石の弛みにやまかがし

幼馴染と三三九度や虹立ちぬ

藻の花の細きせせらぎ石光り

大雪溪もんどり打つて石が落つ

金魚さげ十四歳の反抗期

鴨の子や路傍の石に躓きぬ

金魚玉吊りて変はらぬ父母の家

さいたま 栢尾さく子

高崎 原田秀子

富士見坂虹見る坂と云ひ変へて

緑蔭や社につづく石畳

空蟬や姥捨山の石に鱗

夕虹の出迎へうれし雨宿り

片蔭の石に坐りて見る海図

恋心あるやも知れぬ金魚かな

墓石のいつまで熱き終戦日

天帝のランウェイかも虹の橋

夏開帳石段数へ善光寺

草加 小倉倭子

さいたま 高島寛治

虹の輪を潜り参道石畳

虹立つや白き水尾引く観光船

消えぬ間の虹に願ひを手を合はす

金魚飼ふわれ童心に返りけり

売り声の肩に竹竿金魚揺る

藻を入れぬ水槽金魚落ちつかず

夜の金魚『ワインレッドの恋』に酔ふ

川跨ぐ虹の籠は我の街

まだ残る鉈石ラヂオ夏の果

円舞曲金魚ひらりとターンする
目の合ひし琉金聡とささめきぬ
片虹や遠流の島の暮寂びぬ
虹消えてなほ胸中に残るもの
穴太積みみてふ石垣今に夏深し

久喜 梅澤佐江

黒出目金お江戸生れの鱧捌き
車座になつて飲みたや虹立つ野
あてもなく漕ぎ出る銀輪虹淡し
出番待つ石見銀山蠅叩
浜の小石を耳にあつれば夏の声

さいたま 曲淵徹雄

諍ひの金魚まあるい鉢の中
慈悲心鳥石の心を打ち砕く
東西に架かる大虹世の和み
静けさに蝉のなきがら立石寺
雨上り永遠に消ゆるな二重虹

さいたま 青木鶴城

掬はるる時びちびちと金魚の朱
鱈はためかせ貴婦人の如獅子頭
いつの間に金魚と遊び遊ばれて
大放流に虹の浮き立つ黒部ダム
虹消えて手に七色の真珠貝

大場順子

山寺の石みな白し夏の月
青東風や野面の石の無表情
真夜中の金魚まつすぐ我を見る
窓に虹終着駅の街の空
夕虹をひとり眺むる窓の黙

日高道を

熊谷 越田栄子

月光の水槽眠れない金魚
夕虹や誕生石は深き蒼
神水に浸す御神籤虹立てり
明日は晴れ猫と見てゐる虹の橋
炎天や枯山水に石いくつ

出目金に見られてしまふ寝起き顔
虹を告げ昨日の喧嘩仲直り
石の湊に想ひを浸し夏見舞
夏の星誕生石に住む魔物
石を蹴り後の静けさ夜の秋

川口 野田静香

縁日の和金の右往左往かな
出目金の出目ふよふよと寄合へり
七色を整へて立つ朝の虹
承久の礎石しづかに夏闌くる
戦功を刻む石文晩夏光

さいたま 松井由紀子

虹立つや風車の叫ぶ国境

良き事の知らせか虹のくつきりと

網越しに金魚を狙ふ鋭き目

出目金の今日も瞬き見ず仕舞

敷石にひそと寄り添ふ苔の花

さいたま 笹本啓子

蘭鑄の東大関悠然と

三差路の石の祠や夏の月

高速の渋滞抜けて虹立ちぬ

目が合へば尾を振り来る金魚かな

石段に佇む二人夕焼空

さいたま 村杉清吉

雲の峰ロマン溢るる石舞台

餌撒けば金魚の上に金魚かな

セーヌより虹の彼方の妻を恋ふ

夕立あと石の野仏微笑みぬ

硝子越し金魚の口にキスする児

反町 修

平塚 丸屋詠子

炎天に石灯籠の沈黙よ

緑雨来て渴きを癒やす石仏

出目金と目玉くらべの子供かな

大虹がつつみこみたる城下町

円形の虹を眼下に空の旅

駅員の仕事増やせし金魚かな

「はいおまけ」掬へぬ児にも金魚くる

夕虹の端はあなたの懐に

石灯籠の炎みつむる夏祭

宵待ちの打水吸ふや石畳

梅澤輝翠

さいたま 西幅公子

谷川岳の遭難石碑夏の雲

虹立ちぬ町は狐の嫁入り中

夏の屋根平たい石に熊の糞

なんとまあ金魚モデルのアート展

「あつ落石が」慌てふためく富士登山

窓ごしの暑さにもぐる金魚かな

回想や金魚の尾鰭見てをれば

人恋へば大空にあり二重虹

波遊び帰路の窓辺に虹立てり

石据ゑて仏と拝しトマト添ふ

篠崎紀子

菅原真理

万緑に抱かれ目を閉づ石地藏

静謐を石に落とすや夏椿

レオタード派手にくねらせ金魚過ぐ

町家カフェ金魚の見入る昼さがり

渡月橋さらに跨ぎて朝の虹

朝の虹故郷を指す羅針盤

工房の窯の余熱や虹立ちぬ

一日の旅にも旅情二重虹

琉金の尾のひらひらとひるがへり

夏の蝶関守石を越えてゆく

琉金のモンロー張りの身のこなし

琉金の赤きゆらめき金の舞

余呉の湖天女架けしか虹二重

また一つ駅消えし村虹架かる

庭石の古色に適ふ夏木立

ヨットの帆並ぶ沖合二重虹

東の間の夢をはぐくむ虹の橋

打ち水や青石に浮く流水紋

水替へて勢ひ増したる金魚かな

水槽は己が宇宙よ金魚舞ふ

緋緘の武者ぶりや良し金魚飼ふ

梅雨明けてアンモナイトの化石かな

土用波寄せ来る浜のさざれ石

城山の天守に架かる虹の橋

故郷の田んぼ跨ぎて虹の橋

川口 森川 義子

さいたま 池田 雅夫

琉金の尾の無器用に揺るるかな

人影に口をばくばく金魚浮く

連山の一括りなる虹の立つ

虹仰ぐ児の小さき眼の豊かなり

虹の輪へ溶け込んでゆくロープウェイ

夕虹や少年靴を持ちて立つ

ひとり居の日なが金魚とある言葉

盆供養寺の石段一步づつ

飛び石の裏に生まれし青とかげ

金魚買ふ生きもの飼はぬはずなのに

二尾となり様になりたる金魚鉢

虹仰ぐ宇宙に夢を馳せる子と

大早乾ききつたる石仏

苔の花歳月を積む標石

夕虹や口づけしたり柀の酒

庭石に亀と名を付け夏館

白糸の滝の飛沫を過る虹

夕虹や悲しきことも号外で

金魚掬ひ父より先に手柄たて

井口 俊晴

若狭 島津 初花

井上 玲子

さいたま 荒井 俱子

さいたま 丸山 マスミ

井上 燈女

蘭鑄の眠くなるほど長き糞

さいたま 茂木和子

金魚飼ふ眺めてあきず美の極意

重き眉上げたる先に朝の虹
富士の上虹立つ中へ姉の逝く

神奈川 鈴木康世

あの日あの時虹の彼方へ手を振りぬ

遊女の墓洗ふ青年虹の下
虹二重秘めたる夢のかなふかと

虹消えしあとの夕空一番星

虹消えて眼裏にあり虹の彩

アカシヤの花散る夜の石畳

夏霧のケルンへ小石ひとつ積みむ

和歌山 十倉和子

夏霧やヒユッテの屋根石濡らしゆく

いつの間に金魚に名前どれがどれ
ひたすらに出目金狙ふネイルの指

東京 石田慶子

大礎石遺して沙羅の寺涼し

夕虹や二人無言の右左

涼風や現地講師は石斧手に

朝虹やスマホの連写オフィス街

虹消えて帰心俄かに旅の暮

夏草の隠す積石古戦場

ちよんの間の化粧直しや金魚浮く

さいたま 西山貴美子

見番の金魚はいつも上目勝ち

石坂を一気に下る草いきれ
からころと石畳ゆく白浴衣

草加 河野はるみ

夕虹や牧の小馬の二三頭

虹追うて親を追ひ越す子の背中

夕虹や胸に張りつくペンダント

そつと手を胸に合はすや虹二重
出目金がじつと見詰むる眠れぬ夜

金魚すくふ和金金ばかりが口あけて

新茶一服さらりとぬけて石衣

星野和葉

東京 石川理恵

炎昼や石材店に河童像

掬ひたる金魚持て余してをりぬ
宝石のごとあしらはれ夏料理

伽藍石踏むを憚る夏の蝶

丘の上より見下ろせる昼の虹
うしろ髪引かるる虹の小樽かな

高が石然れど石なり墓

庭石の三角檜円風涼し

炎熱や石州瓦の赤き屋根

緑日や金魚を掬ふ子は夢中
ひらひらと琉金は花宇宙泳

飛行機の虹の中へと消えてゆく
山頂の向かうは虹よ腰下ろす
川幅に小石を投げて飛んで朱夏

虹二重空の色して水明旗
遥かなる灯下管制石灯笼

夏の夜や怪談噺を石の蔵
出目金や金魚屋四代目若旦那
三歳の誕生祝ひに飼ふ金魚

水打つて街整ひぬ石畳

夕虹の消えかかる時母の声
交はらぬ恋を幾度虹二重
存へて金魚が鮎に化くる夜
金魚の眼うるんで見ゆる夕明り

夕虹や銀座歩行者天国に
雨上がり濡れた虹立つ城ヶ島
虹の橋おほこ花嫁振り向かず
鎌倉宮源平池に朝の虹
出目金の大法螺吹いて傾きぬ

さいたま 山田美佐尾

相模原 町野広子

横浜 福田千春

大和 藤澤喜久

夜見世の子等並び金魚の受難の日
金魚鉢の金魚で部屋の花やげり
無人寺石灯笼の苔青し
いつ誰が名号石や登山道
窓の虹隣りの屋根の絵本めく

金魚鉢つるり殻剥く茹で玉子
ラメの服纏ふ踊り子金魚玉
出目金を狙ふ少年ばいを選び
石垣に大きい亀裂青蜥蜴
石畳を過る黒猫大夕焼

石山寺の鐘の音涼し淡海美し
大鳥居石の稲荷は夏瘦せて
飛火野の鹿寄せホルン朝の虹
貸浴衣からころ鳴らす石畳
雀石蛤石や雲の峰

寺の池に大きく育つ金魚かな
若楓宮の石狐の眼の暗さ
木下闇苔むして居る石仏群
雲の峰少年拗ねて石を蹴る
虹二重石の兔の謎の笑み

神戸 上戸千津子

さいたま 内田恵子

神戸 森本早苗

東京 松山清子

葉桜や駕籠で行きたし鬼石へ
金魚見て想ふ鱈背な金魚売
滴れる石段踏みしめ鍾乳洞
ロープウェイ眼下の虹を越えて行く
夕虹や老いても夢を失はず

さいたま 後藤綾子

羽衣のやうに金魚の尾の弛む
お互ひの影を気にせぬ金魚かな
手紙とは時超ゆるもの虹立ちぬ
変はらない日を愛しけり夕の虹
秋待つや異国顔なる石仏

さいたま 吉川拓真

蘭鑄はやんごとなきに尾を振りて
虹二重社殿前にはさざれ石
釣金魚三匹当てて鉢を買ふ
俯瞰せり金魚揺らりと艶姿
虹彼方戦無き世の橋となれ

新井孝磨

花魁のごと琉金裾をひるがへす
虹立つや煌めく雨の止む気配
大柄な友の大柄金魚かな
背の子の重石のごとし片かけり
夏波や蹶くすぐる細石

本橋稀香

背の子の金魚袋を揺らさじと
夕虹や銀座裏行く夕出勤
虹立ちて空に友禅流しをり
石けりのけんばけんばと夏休み
石けりの白墨掠れ夏夕べ

清水桂子

灰明り緋をひるがへす金魚かな
うす紅の金魚の吐息喫茶店
虹消えて応へなきま別れゆく
ハイウェイの行く手を拓く虹二重
敷石を白に化したる虎が雨

霜多光代

眠たげな金魚にこぼす吾の愚痴
遠き日や虹消えぬ間の願ひ事
行く夏や斜めに減りし砥石かな
幼児に虹まで行くとせがまれて
吾の眼をぎつと見据うる出目金よ

池田瑠子

虹立ちて願ひ叶ひし予兆かな
硝子越し一句啓上金魚かな
掬はれし金魚我が家の主となり
吉祥の虹を冠する富士の山
出勤の流石に目立つアロハシャツ

伊奈 菅原卓郎

青苔に埋もるる石仏わらべ顔
踏石に赤き鼻緒や若楓

さいたま 岡田宣子

水替へは夫の役目の金魚かな
虹仰ぎ余生いくたび出会ふかな
虹消えて静かに散りし人集り

長生きの金魚とのたりのたりかな
一匹となりてゆらゆら金魚の尾
夏蝶舞ふ雨のあひまの石舞台
下闇の奥へ奥へと石灯籠
夕虹の消えて漁師の大欠伸

さいたま 下川光子

虹を切る輝きのまま断片に

元田亮一

静心囃す金魚の尾鱗かな

宮崎チアキ

玉肌に貴石煌めく祭笛

金魚さへ近寄りもせぬ黄昏に
星屑や金魚ふうはり旅立ちぬ
石英の砕け散る夜夏逝きぬ

灯ともせば艶やかに舞ひ来る金魚
朝虹や共に働く今日の幸
夢うつつ共に渡りし虹の橋
石段を一気に登り夏の空

着飾りて金魚青春知らぬまま

若狭 飛永 鼓

裏声を武器に男が金魚売る

杉戸 佐々木史女

石畳踏みて滝音苔の花

秀吉の座りし石や新樹光
頬被りして虹の根を訪ふこと想ふ
木洩れ日の石畳踏む苔の花

下駄箱の上の出目金子の宝
鈍色の空に虹たつ通夜の帰路
夕虹や言ふべきことばしまひ置く
夏草や石仏けづりお守りに

忌を修し兄への虹のくつきりと

さいたま 熊倉千重子

夕虹を裂く舞姫の長き爪

伊予 向井章子

二重虹見てより解けしわだかまり
金魚ひらひら此処は下町洋食屋
金魚たち水を換へれば饒舌に
変哲無き父の庭石蟬の鳴く

我屋根に片足乗せて虹何処へ
発破音蟬鳴き止みし石切場
今は友いつか掬ひし金魚かな
夏薊あの日登りし石舞台

円虹を仰ぎ口笛歪みなし
石仏に小さき手合はす夏帽子
出目金の色香羨み見る手相
二兎を追ひ摺み損ねし虹の種
彼の国の天使迎ふる虹の橋

さいたま 新 曆文

童顔の隣家の主人蘭鑄自慢
子育ての名残の金魚吾子の兵鬼帯
滝音の誘ふ溪流石伝ひ
石庭を空に結ぶや夏の雨
女子会のバスに揺られて虹の橋

越谷 阿部幸代

石段に山百合揺るる閻魔堂
滝の道石段のぼり益子の湯
天然の石窟涼し磨崖仏
孫掬ふ金魚飼ひしも夢のごと
車椅子の夫と祈りし虹の空

春日部 諏訪サヨ子

虹が去りなほ立ちつくす望郷や
緑陰の社にぼつり祖の石碑
早魃の最上川原は石ばかり
雲の峰西安碑林石ひかる
出目金や今はなつかし風物詩

さいたま 山岸久美子

散歩道指差す彼方虹ありき
新しい話し相手は金魚かな
石の上座布団干すや土用入り
石の上足跡つかぬ猛暑の日
石に添ひ浮き立つ色よ半夏生

さいたま 小田美智

音楽と虹の共演子らの声
夫を呼び願ひ込めたり二重虹
舞ひ泳ぎ芸術となる金魚かな
四方から愛づる和金や江戸の粹
夕立後石の鏡に映る空

小駒さち子

家籠る金魚に愚痴や独り言
らんちうとがき大将の睨みあひ
ベンチから球児の眼空の虹
駅前少女歓声二重虹
長瀬の石床駆くる子らの夏

武田重子

悩み消え降り立つ駅にジャンボ虹
水槽のジャンボ出目金長寿なり
梅雨にぬれ石灯籠の女性つぼさ
石燈を一气に上りラムネ飲む
猫の手が金魚狙ふや危機迫る

小川洋子

山跨ぐ虹をくぐりてハイウエイ
一匹となりぬ金魚の泡ぶくり
隅つこの好きな金魚に餌落とす
石仏の肩に滴るリズムかな
土用波屋根に石置く漁師小屋

さいたま 森 和子

「ただ今」に口を寄せる金魚かな
藻の陰に片目覗かす出目金魚
敷石を打つ白雨飛沫となりて
虹立つや子のゐる街はあのあたり
ぶらり旅乗換へ駅に虹立てり

さいたま 加藤でん治

水槽に琉金泳ぎフラダンス
雨上りビルの谷間の二重虹
ナイアガラ宿の窓より朝の虹
雨止むや夕虹潜る着陸機
夏の旅飛び石飛んで嵐山

野平美紗子

豪雨過ぐ惨禍の先の虹の橋
十年も生きし金魚よ鉢狭し
山寺や登る石段蟬しぐれ
磨崖仏肌柔らかき大谷石
池の石亀並びゐる夏日影

春日部 仲田利子

袖濡らし金魚を掬ふ声高に
越後獅子真似て逆立つ金魚かな
夏の夜の宇宙の旅終へ隕石は
白糸に虹の立ちたる時を得て
釣り上げし石鯛の面律律しくて

田中章嘉

出目金と目と目が合ひて餌を撒きぬ
アクアリウム琉金の尾の優雅さや
虹立つや児のお絵かきに夢あふれ
恐龍の化石に見入る麦わら帽
踏石を歩き白百合に迎へらる

さいたま 後記朝香

振り向きつ行くランドセル背なに虹
揺られつつ露店の金魚帰り道
メール来る画面はみだす二重虹
花石榴友の名のあり集合墓
水面跳ぶ石切り遊び大夕焼

鬼石 野口和子

正坐して懐石料理夏座敷
緑蔭に碁石打ちあふ定年後
水打つて湯気立つやうな石畳
大量の軽石漂着大南風
夕虹の片足かかる跨線橋

和歌山 川崎道子

朝虹は大雨の兆し母の説

登り来し坂見返れば夕の虹

石のネックレス効き目の失せて夏旺ん

退屈な婆さま癒す金魚鉢

肥満かな婆さまの飼ふ出目金は

和歌山 西浦千枝子

てんでんに買ひし金魚の相寄らず
この虹をいつしよに見たい人のをり

虹渡り風になりたや公休日

瓜漬けの石を拾ひて帰る来ぬ

虫干の箆筒奥より指輪石

川口 新井のり子

待ち時間鉢の金魚とお見合ひす

教室に金魚悪餓鬼穏やかに

傘持つて行けと言ふ母朝の虹

授業中小さき響動めき虹立てり

飛石を子らひよいよひよいよと夏の川

滑川 宮崎紫水

茶室への径に止め石風薫る
緑蔭に笑まふ石仏十三体

涼しさや箱根峠の石畳

溽暑なり流石に化粧ためらひて

送り梅雨鬱飛ばさむと蹴る小石

さいたま 斎藤みよ

金魚鉢騒ぎて音は無かりけり

終止符までの退屈な日々金魚飼ふ

いつまでも消えぬ裏見の滝の虹

朝虹を添ふ事の無き人と見る

八月の石黒々と濡れてをり

町田 瀬戸雄二郎

明日があるさ夕虹仰ぐ駅ホーム
時代劇あはれ毒味の金魚ども

炎帝も攻めあぐねたり大谷石

砥石もて青む包丁鱧さばく

礎石なるあまた御霊や終戦日

吉川 杉浦理恵

花石榴厨の窓にからからと

石垣の割れ目も何の振花

水草の花となりしや獅子頭

てらてらと金魚ゆらゆら金盥

夕虹や明日のゴルフはノーボギー

さいたま 飯田忠男

新入りの金魚戸惑ひ泳ぎをり
家路急ぐ金魚の袋見つめつつ

荒磯や一瞬の虹立つ夕べ

虹立つや離島棧橋旅の果て

流螢や戦火逃れし石畳

草加 外村紀子

蘭鑄の氣鬱つひりや頭重づかりきこと

さいたま 横山礼子

さいたま 鈴木敦子

琉金の尾鱗ワルツに揺れにけり
草屋の出目金一尾留守居番

虹立つや願ひを三度吹けり
父に似し石を探しぬ夏の川

庭園に万の寶石夏の露

東京 飯室夏江

和歌山 高橋満耶子

虹立ちて父の命日思ひ出す
石割りてこぼれ種咲く夏薊

片蔭に寶石展への列長し
ピロードの部屋に金魚と占ひ師

虹の輪の下半分は地球裏

川崎 鈴木玲子

さいたま 高原和子

大仏に広き光背二重虹
金魚より見れば我とて鉢の中

待合の金魚の尾鱗ふはりふは
頼朝の石塔ひそと雲の峰

日焼してアंकレットの石の碧

所沢 関根千恵

大阪 遠藤人美

しろがねの寶石放つ滝しぶき
二重虹淡きクレヨン減りにけり

ばいよりも軽き金魚は今五寸
琉金の見せびらかすはひらひらと

朝虹や今日も弁当できあがり
けんかして眺めた空に二重虹
公園の水辺の虹とゴムボール
夕虹や小走り向かふ保育園
雨音に書斎の金魚静まれり

石庭の波におぼるる夏の蝶
大夕立洗ひあげたる石畳
用水路にあまたの金魚はしやく声
手作りの散弾銃や雲の虹
夕虹や触れないやうにその話

夕虹を夫と並びて見つめをり
夕虹や明日は良いことありさうな
独り居の我を和ます金魚かな
金魚あまた深海にゐる心地して
悔しさの夜や金魚を掬へずに

夕虹の消えて自治会再開す
二重虹辞令抱へし田圃道
石蹴りの白線掠れ晩夏かな
墓石に押忍の一札送り梅雨
夏雲や石神さまのゐるバス停

夕虹や帰宅を急ぐランドセル
石段をじやんけん遊び裸足の子
虹立つや滝行の南無とどろけり
出目金の赤のきらめき月細し
石跳んで滝に打たるる行者かな

さいたま 山下ユリ子

唇太き金魚は丸く太りたり
大鉢に鱗光らせ舞ふ蘭鉢
けんけんぱと石蹴り遊び夏休み
突然の雨が上がりて薄き虹
雨上がり樹木の葉つばに虹宿る

和歌山 嶋田洋子

飛び出して金魚の腹が波をうつ
結葉の光零るる石仏
木下闇白き花散る石畳
「虹が出てます」見知らぬ人の弾む声
水溜り虹を映して静かなり

奥山粉雪

大蜥蜴石を踏まへて威厳あり
石庭の白砂に似合ふ浴衣かな
車椅子虹良く見ゆる処まで
クレーンの止まる大虹ビルの街
金魚鉢棚に位置占め二十年

さいたま 川村 治

朝の虹うまくいきそな予感する
もどり梅雨あわだつ波に三波石
這ひ這ひの金魚の鉢へすすみけり
切れ味のよき黒曜石で瓜さざむ
野良猫のねらふ真赤な金魚かな

鬼石 榎原聰子

銀座にて動く宝石金魚展
出目金やこぼれさうなる大きな目
大迫力のダム放水や二重虹
八丈の海に半円虹の橋
明石では活蝸の這ふ魚市場

森下美智枝

縁日の金魚を掬ふ難しさ
朝虹の大きくグアムの海の上
夕虹や三線聞こゆ島の宿
秩父札所の石仏群や走り梅雨
日盛や玉石垣の遺る島

さいたま 野村美子

小さきカフェ挨拶先づは出目金に
ぼい斜交ひに掬ふ金魚や息を凝し
眼前の虹走り抜ければ消えてをり
夕虹にそつと取り出す手帳かな
人真似て小石七個のケルンかな

綿貫ひさの

峰見上げ崩れケルンに足す小石

東京 水落守伊

石抱へ水辺を走る川遊び

滑り行く水切り石や夏の暁

出目金のゆらり膨らむ金魚鉢

バス待つや雨の間合に朝の虹

縁日の掬ふ金魚に水明かり

ゆるやかに水玉ゆるる金魚かな

朝の虹父と見し海輝けり

夏の浜波打ち際の石丸し

飛石の曲がりし先に蓮浮葉

しんとして茶毘の煙を抱く虹

不意打ちのごと現はるる虹見たり

水槽の金魚ひくひく午前五時

水ほどくごとと琉金はゆつたりと

この先は石ころの道木下闇

稲妻の光る夕闇石畳

夕虹の大手町信号は赤

土砂降りや池底の金魚動かざる

金魚鉢ファッシュョンショーの美姫の舞

東京 山中いちい

都会にも空はありとて虹かかる
はかなきは触れし指先夕の虹
夕立やたちまち黒き石畳
金魚跳ね今にも雨の降りさうな

さいたま 秋谷風舎

金魚競り盥を囲むしやもじかな
生きの良い琉金を競り落したり
浅間山草津に虹を渡しけり
片虹や滲む岬の細き道

東京 畑宮栄子

石段で飽かずに触れる含羞草
石好きの友の講釈雲の峰
江戸城の石垣めぐる夏の空
金魚鉢透明に描き水彩画

和歌山 南條さわゑ

金魚田で掬ふ傘寿の腕だめし
山里の校舎にかかる虹の橋
炎天に石仏顔を白くする
君の影虹の彼方に求めつつ

葛城千世子

小石蹴り金属音や夏の空
石段に正座する鴨夏の川
石包丁のままごと遊び小判草
虹の彩思いつ切りの深呼吸

鈴木藻好

小山敦子

さいたま 木村るみ子

病室の窓に濃き虹黙礼す

さいたま 染矢峯雄

園児らは庭に飛び出し大きな虹
里の路地石蹴りの子ら汗光る
石舞台あすか路の空花石榴

黒猫と金魚や母の形見かな
軒を打つ雨に踊れる金魚かな
夕虹や空飛ぶ車近未来
石垣の衣となれり野朝顔

大阪 飯塚智恵子

金魚玉地球に小さきかすり傷

森美枝子

鈍色の尾鰭忙しく金魚かな

さいたま 鳴海順子

虹を追ふ紙飛行機の透明に
日盛りの石の声聴く穴太衆
石棺の眠りを醒ます苔の花

着信す虹が出てると画像付き
虹を見る上野で阿修羅見たその日
さざれ石文箱の底に秋近し

朝もやに白虹立ちて消えにけり

岡田芳春

水槽のトンネル尾を振る金魚かな

川島夕峰

沢登る轟音に虹輝けり

夕虹に時を止めたや消えぬ恋

夕虹や長きトレイル歩きさきり
虹消えて池塘静かに花を閉づ

金魚鉢ビー玉ひとつ底石に
吾子の積む石崩れしや夏帽子

「あたり」棒金魚の墓となりにけり

樋口元美

灯点れば金魚きらきら子ら覗く

宮代 関谷多美子

手のひらに残る金魚のぬめりかな
妖精のくぐる虹の輪夢の国

路地の午後子供集会金魚の池
虹を見る子らよ大きく育ちゆけ
草原に虹立ち子らが走り出す

夕虹や旅の疲れは消えてゆき

吾が庭に金魚置きざり豪雨去る

藤沢 小島喜代子

石割山割るは刀か雷か

流山 日吉亜弥子

流れ来し金魚狭庭で救助待つ

夕虹や龍宮城めく海の駅
虹発見児は家中にふれ回る

夕立や滑らぬやうに石畳
虹立つや愛犬待つか尾を振りて
一匹も掬へぬ男が買ふ金魚

独り居や孫の数ほど金魚飼ふ
水草に隠るる金魚赤勝り
石塀にゆりの香まとふ白き猫
ビルの間に三十五度分の虹

さいたま 竹内万美

銅鑼の音を残し出船が虹くぐる
校庭の子ら指さし騒ぐでかい虹
石段に座り一息夏木立

さいたま 湯浅 和

虹の景スマホ画面に飛び込めり
七色の虹のカーブをなぞりけり
葉一枚蟹の住み処の川の石

東京 柳父はる

汗光り辿り着きたる立石寺
水替へてまぶしき朝の金魚たち
手に下げし金魚二匹の新家族

緒方みき子

彼の世への梯子かかりぬ朝の虹
金魚鉢よごれ看護士人出欲し
石投げて笈待ちちゐる噴井かな

行方 山岸弘子

なすことも無くて金魚の水替ふる
夏野より外れて石に描く目鼻
道端の石にも瑞気夏の夕

古池恵里子

睨みあひ瞬きなしの大金魚
大金魚苔の小石も美食かな

草加 持永喜夫

おはようと声かけ金魚ウインクス
窓辺にはモンローウオークの金魚かな
掬へども金魚ひらりと背をむける

福田育子

虹立ちて色豊かなる雨あがり

さいたま 落合和枝

逃げ惑ふ金魚掬ひししぶきあく
鞍馬石踏みての茶室夏深し
吾の作る勾玉首に晩夏光

糸井しるく

朝虹や今日も無事にと両手上げ
出目金や尾ひれの遊び競ひ合ふ
夕虹や明日の予定は健診なり

夏季競詠

山本鬼之介

作品評

蠟石の線路どこまで日向水

由良ゆら女

【はじめに】

毎年十月は、水明全会員による夏季競詠を実施しています。その目的と意義についての説明効果が現れてきたことを嬉しく受けとめています。しかし、今年残念に思ったことがあります。それは、出題した兼題について理解していない投句者が数人居たことです。その内容を以下に示し、今後における出題者と投句者双方の反省材料にしたいと思います。

【兼題「金魚」「虹」について】

「金魚」は、「動物の部」としての金魚であり、殆どの歳時記に掲載されている「生活の部」の「金魚売」や「金魚すくい」は含まれていなかったのです。

「虹」は、「天文の部」に属し、自然現象として現れる虹に限られますが、水道ホースでの水まきや、噴水で発生する人工的な虹を詠んだ句がありました。

【今後の反省】

投句される皆さんにお願いしたいことは、兼題の範囲について歳時記などをよく読んで充分理解してもらうことです。出題する側も、今回を例にとれば、「金魚は動物の部に限り金魚売りや金魚すくい等は含まない」とか、「人工的な虹は不可」などの但書を付けることが良策だと思います。

車の往来がほとんど無い町内の路地に、子供が蠟石を使って落書した線路の絵である。「丁寧」に枕木まで描かれていて、通りがかった大人が見れば「なんとまあ……」と驚くことであろう。蠟石も季語の日向水もレトロな物であり、句の内容から見て時代の遡及を否定できないが、現代でも過去でもない異次元の世界へ読者を誘い込むような不思議な趣をもった俳句である。

日向水から連想するのは、むかし盥にはった水を屋外に置いておき、夏の陽射しで生ぬるくなった水で行水をしたことである。さすがに現代では盥で行水する人は居ないと思うから、この日向水は陽に晒して塩素を抜き金魚の水として使われるものかと推察する。何れにしろ作者の眼には、路地の奥の奥まで延々と続く線路の絵と、ある家の戸口に置かれている日向水とが、昔に見た情景のままいま確りと見えている。

美容院鏡の中の金魚かな

矢作水尾

作者の行き付けの美容院である。院内にいろいろな金魚が飼われている水槽があり、泳ぎ舞う金魚の姿に客が癒されて

いる。和金が、出目金が、蘭鑄が鏡に映り、美容師との雑談に華を添えている。今日も一日暑かった夏の夕暮が近づいている。

ひたと止むダムの放水二重虹 大橋 勉代

本句の評を書くにあたり、「ダムの放水二重虹」について勉強してみた。それによると、放水には、①洪水調節②事前放流③河川維持放流④フラッシュ放流⑤排砂放流⑥観光放流⑦点検放流などの種類がある。観光地のダムで観られる放流はイベント的なもので、富山県の黒部ダムを筆頭に、北海道の豊平峡ダム、神奈川県の宮ヶ瀬ダムなどが有名である。掲句のダム放水が、何処のダムでどのような目的のものかは判らぬが、想像を絶する大量の水がびたりと止まった瞬間には、放流中とは全く異なる感動が湧くだろう。放流によって生まれた人工的な虹と空に大きく架かった二重虹とのコラボレーションに、人々の胸が大きく膨らんだ。

虹の根や余熱をさます登り窯 境 延昭

日夜丹精込めて焼き上げた作品が仕上がりに、安堵の息を大きく吐いた陶芸師。彼方の山裾から立ち上がっている大きな虹に出会ってここ数日の苦勞が解消したように思えた。焼成温度が一三〇〇℃にも達する窯はそう簡単には冷えないのと

同様に、陶芸師の心の高まりもそれと同じであろう。

鉄工場の汚れし顔のまま夕虹

永野 史代

社長以下従業員十名足らずの町工場（しょうば）の情景である。機械油で顔まで汚れた一青年。暫しの休憩時間に工場の扉を開けて外に出ると、雨上がりの夕空にくっきりと虹が出ていた。故郷の田圃道で眺めた虹を想い出し感慨深げな工員。『さあ、今日も残業だ頑張ろう』。寅さん映画の印刷工場を彷彿させる作品である。

虹仰ぐ水禍の農夫手を合はせ

横山 君夫

今年の自然災害で特筆すべきは、線状降水帯の発生がもたらした大水害であろう。想像を絶する大量の降雨による家屋の浸水や流失、土砂崩れによる家屋の倒壊や怪我人・死者の発生など、日本各地で被害が続出した。思わぬ大水害で田畑が冠水してしまった農夫。その悲惨な現状を眼にして言葉を失い、嘘のように空を飾っている虹を仰ぎ見て手を合わせている農夫である。農夫の抱く切迫感が溢れ出ている。

告白は立ちたる虹の消えぬ間に

大村 節代

告白の内容はなんであろうか。愛の告白か、それとも懺悔

の告白であろうか。読み手の立場とすればいろいろと思ひ浮かべるのだが、到底正解は得られない。それを愉しむのが作者の狙いなのかも知れない。

一頭といふ蝶の重さや石の上 石山かつ子

「目から鱗……」の俳句である。ものの数え方や単位は結構複雑で、判らないことが多い。蝶を頭で数えるのもその一つで、テレビのクイズ番組でもよく出題されるようだ。何故蝶が一匹でなく一頭なのかを調べてみて合点がいった。簡単に言えば、「西洋の動物園での蝶の飼育と西洋の昆虫学者の論文、論文を二十世紀初頭に日本語に翻訳した際の誤訳」ということらしいが、それが蝶の正式な数え方として定着してしまったようだ。頭と数えるには余りにも軽い蝶を観察している作者の心情が、正直に表された傑作である。

虹消えて現に返る三保の浜 五明 昇

羽衣伝説でお馴染みの静岡市の三保の松原の浜辺である。古来、富士を望む景勝地として識られ、昔の銭湯の壁絵の主流が、三保の松原と帆掛け船、そして、借景の富士山を描いたものであった。

今まで三保の松原の上空を彩っていた虹によって、羽衣を纏った天女との逢瀬を夢想していた作者であったが、無情にも消えてゆく虹を見て現実に還ったのである。何時の日かに

訪れた三保の浜を回想しての一句かと思うが、ロマンと臨場感を兼ね備えた作品である。

夕の虹目を離す間に消え失せる 網野月を

夕方現れる虹は、色彩自体が空に溶けこんではいるが、間違ひなく存在している。日中の虹とは違う情感に惹かれて眺めていたが、寸時目を離れた隙に消えてしまった。街の中で偶然見掛けた魅惑的な女性が、一瞬人混みに姿を消してしまったような空虚さを感じたのではなからうか。

鏡の中に虹のひとはけ美容院 柚木治子

美容院の大鏡。その中に、刷毛でさっと色を付けたような虹の一片が映っている。虹の橋が映っていれば申し分ないが、ほんの一部分の虹も捨て難い。心にしっとりとしたものが残った日であった。

旅ゆけば酒旅ゆけば虹二重 椎野美代子

浪曲師・二代目廣澤虎造の「清水次郎長伝」の演出である「旅ゆけば」に魅了された。「旅ゆけば酒」は、なかなか豪儀で結構。「旅ゆけば虹二重」で、確りと俳人の意志を表明した。コロナ禍が続いているこの三年、気ままな旅に憧れ

る作者の心の捌け口とも受け取れる一句である。

虹消えて明日は奥穂のジャンダルム

渋谷きいち

山登りをする人には耳慣れた言葉であろうが、そうでない人には耳新しい言葉であろう。ジャンダルムはフランス語で国家憲兵を意味し、山岳用語で「尾根上の通行を邪魔する岩」のことを言う。日本では、奥穂高岳の西南西にあるドーム型の岩稜に代表されると聞いた。穂高連峰の登山中に、嶺から嶺を跨ぐ雄大な虹に遭遇し、明日の難所に挑戦する勇気が湧いたのであろう。なんとまあ格好いい俳句であることよ。

睦言を吐くたび泡を錦蘭子

正木萬蝶

金魚の世界を人間の世界に同化している。金魚の生態を観察している内に、相手が次第に人間じみて見えてきたのである。しかし、単なる呼びかけではなく、睦言であるから只事ではない。錦蘭子が吐き出す小さな泡の一つ一つが睦言のように思えてきて、自分も金魚鉢に飛び込んで睦言を交わしてみたくなったのか。兼題の「金魚」をここまで詠み熟した作者の度胸と技量を評価したい。

敷石に刹那止まるや拵蝶

正木萬蝶

「拵蝶」は「せせりちよう」と読む。広辞苑によると、セリチヨウ科の蝶の総称で、特徴は、小形で翅が小さく、体が翅に比べて肥大し、蛾のように見えると解説されている。この説明を読んで筆者も以前何処かで見掛けたような気がした。作者は、敷石に瞬時止まった拵蝶を見て興味を持ち、昆虫図鑑などを繙いて調べたのではないかと思う。「刹那止まる」が、俳句の格調を高めている。

虹立ちてグリム童話の二つ三つ

染谷正信

グリム童話は、ドイツのグリム兄弟が収集したメルヒエン（昔話）集で、一八五七年に出版した第七版が決定版である。現在一七〇以上という世界で最も多い言語に翻訳され、本の挿絵が非常に多く、世界で最も多くの人に読まれている童話本である。赤ずきん・白雪姫・狼と七匹の子山羊・かえるの王様・ブレーメンの音楽隊など、どれも子供の頃に読んだ物語である。綺麗な虹が立った空を見上げて、グリム童話をお孫さんに語り聞かせている作者を想像すると、思わず顔がほころんでくる。

金魚下げ石堀小路行く舞妓

田寺玲子

京都の夜を彩る舞妓さんの日中の姿を詠んだ句だと思ふ。歌舞音曲の厳しい稽古を終えた後の楽しい時間である。仲良

しの舞妓さんと肩を並べて住まいの置屋へ帰る道すがら、金魚を数匹買って下げてゐる。石塀小路が、千年のみやこ京都の雅な町並の様子を遺憾なく映し出している。

君下りて来よ虹の橋消えぬ間に 石井喜恵

虹を仰ぎ見て語りかけている君とは、恋しくまた懐かしくもある亡き夫のことではなからうか。少しづつ薄れてゆく虹の輪郭と色彩に、心の中で「早く早く」と叫び声を上げてゐる。天上界と人間界を結んでいるかのような虹の架け橋を信じてみたくなった。

琉金や娘盛りの身のこなし 鳥羽和風

中国から琉球を経由して日本に渡来したので「琉金」の名が付けられたという。寸詰りで体高のある丸い体で、それぞれの尾鰭が長く発達している。長い尾を靡かせて泳ぐ姿は実に優美で、金魚の代表格と言える最も金魚らしい金魚である。さて、作者は数匹の琉金の中の特に一匹に注目し、その姿を「娘盛り」と表現した。長い袂の振袖を着た成人式の娘さんのように思えてきたのであろう。

片脚は忠治の山にかかる虹 近藤徹平

江戸時代末期、上州岩鼻の代官所を襲って米蔵を開放し、飢饉に喘ぐ農民を救済したと伝えられている俠客・国定忠治が、関東取締出役（八州廻り）が率いる捕方から逃れて赤城山に立て籠もった。掲句の「忠治の山」とはこの「赤城山」のことである。忠治の逸話とはおよそ場違いな虹が、いま赤城山に片脚を掛けているのだが、恰もその虹が、赤城山の山裾に集結した捕方を睥睨している国定忠治のように思えたのかも知れない。

鍵つ子のテーブルに置く金魚かな 檜鼻ことは

「鍵つ子」という言葉が多く聞かれた時代があった。母子家庭を思わせるこの言葉からは哀感を禁じ得ないが、一方では、逞しく成長してゆく子の姿が見えてくる。我が子が抱く淋しさを少しでも和らげようと、母親が与えた金魚なのだろう。その子が金魚を相手にして母の帰りを待っている。

夕虹と握手してゐる象の鼻 大塚茂子

人間や猿の手のように、大きな物でも細かい物でも巧みに掴み取る象の鼻。閉園時間が迫った動物園の象舎の光景である。象が鼻を高く挙げてゐる様子が、まるで虹と握手を交わしているように見えたのであろう。なかなか味わいのある俳句である。

水琴窟

(水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

噴水の前がゴールや走りきる

飯室夏江

コロナ禍にあっても市民ランナーの数は変わっていないようだ。マスクを着用しながら走っている人も見かけられる。街の公園の噴水広場をゴールに決めた。涼しげな噴水に身をあずけたい心境だろう。「走りきる」に充実感があふれる。

夏めきて風ざざ波に乗りにけり

秋谷風舎

「ざざ波」を起こすのは「風」の方であるが、ざざ波に風が乗るといふ逆の発想が強く印象的である。草や木は緑一色に、街の景色も人々の服装も夏めいてきた。「ざざ波に乗りにけり」の断言が初夏の心地よさを引きだしている。

深呼吸夏めく風に味のあり

川村 治

新緑の季節を迎え、木々の多い町を歩いていると思わず深呼吸をしてしまう。若葉からは大量の酸素が発つせられ森林浴の恩恵を受けている。「夏めく風」の味とはどんな味なのであろうか。五味のうち、やはり「甘い味」であろう。

縄文の住居跡とや草茂る

諏訪サヨ子

「縄文の住居跡」には、石器、土器や貝塚など、その形跡がいたるところで見つかっている。今では「草茂る」中に、小動物や水の音など、縄文の暮らしてあるかのように思える。

着岸の船は伊豆から初がつを

森下美智枝

「初がつを」は黒潮に乗って日本近海を東上する若い鯉で、夏に初めて捕ったもの。伊豆半島沖や相模湾で捕獲した鯉を最寄りの漁港で水揚げする。活きのいいまま食卓にのぼる。初鯉は今でも珍重され、季節感の強い魚の一つである。

風が追ふ風船と児のおにごっこ

武田重子

「風が追ふ」が重点。「風船と児のおにごっこ」は普通の光景であるが、そこに風が加わりうとしているところが独創的でいい。順当なら、風に吹かれた風船を児が追うのである。発想の転換に推敲の形跡がうかがわれる。

薫風や車椅子押す夫の黙

村山八千代

草原の径であろう。散策路の草木を渡って、南風が匂うようにすがすがしく戦いでいる。何も言わず気遣うように同じ速さで車椅子を押す夫の思い遣りと、それに対する感謝の気持が「夫の黙」の中に込められている。薫風が心の中にも。

青空を見上ぐる小さき鯉のぼり

石浜悦子

広い庭で雄壮に泳ぐ「鯉のぼり」。近年は高層マンションの窓で見かけられる「小さき鯉のぼり」。大空に向かって小さな鯉のぼりが、存分に泳ぐことを夢みているのであろう。それは幼子の夢でもあり、子に対する大人の夢でもある。

還暦や吾に降り注ぐ花吹雪

飯塚智恵子

干支（えと）が一めぐりするのが六十年。それにちなんで数え年の六十一（満六十）歳を「還暦」といい、長寿の祝いとした。折しも桜が満開。「花吹雪」が吾の還暦を祝つてくれているかに舞っている。還暦を迎えた悦びに浸っている。

ハミングに弾む足音風薫る

鈴木敦子

緑の大地を匂うように吹き渡る南風。その心地よさに思わず「ハミング」して通る。軽やかな足取りを「弾む足音」と形容している。稲畑汀子は《見えてゐる海まで散歩風薫る》と詠んでいる。きつとハミングしながらであったことだろう。

吉宗は白馬で参上和歌祭

高橋満耶子

紀州三大祭の一つ「和歌祭」。別名「紀州の国祭」「天下祭」などと呼ばれ、五月に行われる。テレビ時代劇さながら「吉宗」に扮した役者が「白馬で参上」して祭は最高潮。

友を待つ茶室に一輪山法師

小島喜代子

野趣に富む「山法師」も近年は庭木として親しまれている。白い苞の先端は尖り、一輪挿しとしても存在感がある。客人を迎えるときの準備や心配りを巡らすことも楽しみであり、そうした心境を一輪の山法師に托しているのだろう。

ひらがなのスコアボードやこどもの日

遠藤人美

テレビのニュースで、子供の日のイベントを「ひらがな」だけでボードに名前を書いてゲームをする様子を見た。「こどもの日」に親と子が一緒にゲームをして楽しむ光景が目につかぶ。幼い子をおもんばかる気遣いがうれしい。

無職なり手持ちぶさたのところてん

持永喜夫

栄養価がほとんど無い「ところてん」。定年後の心境であろうか。無職となつて別段することがない。散歩も済み、読書にも飽きた。しかたなく「ところてんでも突いて食べようか」と思ったのだろうか。その退屈さのみごとくに詠んだ。

天空へ湧きつ広ざる雲の峰

古池恵里子

「雲の峰」は入道雲とも云われ、白く濃くむくむくと空に湧き昇る。助動詞「つ」は動作、作用の完了を述べ、併せて確言する意を持つ。「湧きつ昇りつ」の形が好ましい。

網野月を選

山紫集

夏の朝五体投地の若き僧

夏の朝牛乳壺に白き筋

楸に打つ楔の音や夏の朝

起き抜けの一杯の水夏の朝

池田瑠子

村杉清吉

鳥羽和風

森本早苗

以上特選

斎藤みよ

榊原聰子

笹本啓子

佐藤克之

篠崎紀子

渋谷きいち

切株に缶珈琲を夏の朝

裸婦像を割り出す鑿夏の朝

生きてゐる続きの夏の夜明けかな

かぶりつく取れ立ての幸夏の朝

呼ぶ鴉応へる鴉夏の朝

夏の朝一番列車待つ病窓

野田静香

内田恵子

藤澤喜久

近藤徹平

森川義子

丸山マスマ

夏の朝犬にてこざる老婦人

夏の朝夫の作りし御味噌汁

雨戸開く音で始まる夏の朝

夏の朝大地抱きしめ深呼吸

狭小の庭へ水遣り夏の朝

露地野菜挽いでがぶりと夏の朝

夏暁の風を残して小鷺翔つ	下川光子	夏の朝血圧手帳くらべをり	高橋満耶子
日捲りをはがす田翁夏の朝	菅原卓郎	親子らのラジオ体操夏の朝	武田重子
山へ発つ藍がうすらぐ夏の暁	菅原真理	朝焼の中のマラソン顔馴染	田中章嘉
山鳩に里偲ばるる夏の暁	杉浦理恵	カーテンを突き差す日の出夏の朝	飛永 鼓
寝貯めせし三連休の夏の朝	鈴木藻好	離島の旅風新しき夏の朝	外村紀子
イーアーサンスー羽根蹴りの夏の朝	鈴木玲子	夏の朝スーツ姿で凜と行く	南條さわゑ
明けしや湖畔の乙女夏の朝	諏訪サヨ子	穂高縦走岩肌濡るる夏の朝	西幅公子
母と子と元気に散歩夏の朝	関谷多美子	夏暁の夫の顎ひげ銀髪に	野口和子
何処からか水匂ひ来る夏の朝	瀬戸雄二郎	幼子の問ひに窮する夏の朝	野平美紗子
水飲めば丹田に力夏の朝	染谷正信	夏の朝弁当作りに四苦八苦	野村美子
南仏のゴルフ三昧夏の朝	反町 修	夏の朝茅の輪くぐりて無限大	畑宮栄子
生業の槌音響く夏の朝	高島寛治	浅漬けの紫紺にめざむ夏の朝	原田秀子

風抜けてうつらうつらと夏の朝	樋口元美	夏の朝夢を蹴とばす子の寝相	本橋稀香
隣室の目覚し時計夏の朝	日高道を	子等のはや森より戻る夏の朝	森 和子
薄味に慣れて馳走や夏の朝	檜鼻ことは	夏の朝頭活入れ英会話	森下美智枝
夏の朝はや隣よりモーター音	福田千春	家系図を継ぐ男の子や夏の朝	森美枝子
妖怪が深山に消ゆる夏の朝	保坂翔太	薄明を瞼に重く夏の朝	山岸弘子
夏の朝惚けて残る月の色	曲淵徹雄	カード掲げラジオ体操夏の朝	山田美佐尾
まだきみの夢の途中よ夏の朝	正木萬蝶	灼熱の予感を抱いた夏の朝	山中いちい
夏あかつきはや人影の動く畑	町野広子	夏の朝愛馬で馳せる牧草地	湯浅 和
夏の朝太極拳の気のうねり	松井由紀子	万歩ゆく歩幅は夏の朝なりき	横山君夫
先づは目に青き故山を夏の朝	宮崎紫水	夏の朝柔らかき土踏みに行く	横山礼子
窓開くる幽かな風や夏の朝	宮崎チアキ	笛太鼓ふんどし締むる夏の朝	青木鶴城
順々に門灯消ゆる夏の朝	元田亮一	犬友のブラウス青き夏の朝	秋谷風舎

君がゐて聴く潮騒や夏の朝	新 曆文	夏の朝羽化した翅は漆黒に	梅澤輝翠
夏暁の気に包まれし畑も吾も	阿部幸代	夏の朝先づは目覚めのスムーズー	梅澤佐江
切絵図や赤き神社仏夏の朝	新井孝磨	夏の朝昨夜の一句推敲す	大塚茂子
明け易しほがあほがあと明烏	新井俱子	渡し出る潮風清ら夏の朝	大場順子
夏の朝頬笑み返す人ありき	飯田忠男	夏の朝野菜挽ぐ音のここかしこ	岡田宣子
Tシャツの泳ぐ平和や夏の朝	飯塚智恵子	花々や息吹き返す夏の暁	奥山粉雪
それとなくうつらうつらと夏の朝	池田雅夫	渡良瀬の「ひなた」の巣立ち夏の朝	加藤でん治
猫牛鳩駱駝のポーズ夏の朝	石川理恵	高原の採りたてレタス夏の朝	木村るみ子
さはさはと庭掃く音や夏の朝	石田慶子	野菜サラダ卓にたつぷり夏の朝	熊倉千重子
夏の朝朝のつまづき繰り返す	井上燈女	窓全開珈琲はモカ夏の朝	河野はるみ
夏の朝あたり睥睨明烏	井口俊晴	夏の朝外で一杯立つ香り	小駒さち子
彩雲に良きこと予感夏の朝	上戸千津子	軒先より風の立つ音夏の朝	越田栄子

木の家の雨戸の数よ夏の朝

後藤綾子

周期表をよみおぼえする夏の朝

小林京子

山紫集作品評

網野月を

切株に缶珈琲を夏の朝 野田静香

上五の「切株に」に拠って作者が考えているだろう空間の設定へ読者は想像を広げることができる。「切株に缶珈琲を」持った作者が座ったのか、「切株に缶珈琲を」置いたのか、は判然としないのだが、指定の空間には作者と缶珈琲と切株があるのである。時間の設定は季語通りの「夏の朝」なのだ。中七の「……を」を使用してその後の省略に余韻を残すことに成功している。

裸婦像を割り出す鑿夏の朝 内田恵子

「鑿」であるので、「割り出す」という動作の修飾語が付いたのであろう。まだまだ原木には裸婦像のそれぞれのディテールに細かい彫り込みは施されていない状態で、つまり初め

の荒削りの段階である。それでも作者は、その荒削りの原木同様の木の塊から裸婦像であることに思い至ったのである。「夏の朝」の光の魔術かも知れない。

生きてゐる続きの夏の夜明けかな 藤澤喜久

上五から中七にかけての「生きてゐる続き」とは言い得て妙である。作者だからこそその措辞であるし、そこに「夜明け」を見出している精神の強靱さに敬服するばかりである。秀句である。

かぶりつく取れ立ての幸夏の朝 近藤徹平

中七の「取れ立ての」から、海の幸ではなくトマトやキュウリを想像した。上五の「かぶりつく」が決め手である。もちろん魚介でも「かぶりつく」態になる料理はあるのだが、座五の季語「夏の朝」から「取れ立ての」野菜を連想するのは至極自然であろう。昨今は家庭菜園やプランタなどで野菜の栽培を楽しむ方も多いようだ。ただ、解釈のあらゆる可能性を否定するものではない。作句も自由ならば鑑賞も自由なのであるから。

呼ぶ鴉応へる鴉夏の朝 森川義子

番の鴉というよりも、鴉の親子のような気がする。多分、作者にもどちらなのかは判別できなかったに違いない。筆者はマンション住まいのころ、毎朝飛来する鳥に呼ばれるようにして、ベランダに出て「おはよう」と鳥に言い掛けていた。

その鳥は、毎回応答を返してくれたものだ。実に頭の良い鳥である。そうすると「呼ぶ鴉」と「応へる鴉」は同一ということになってしまふのだが、それでは詰まらない。人間が介在しないで、鴉同士のやり取りとして解釈した方が面白そうである。

夏の朝 一番列車待つ病窓 丸山マスマ

明けるのが早い「夏の朝」に「一番列車」の始動を感じ取っている。座五の「窓」は視覚的な必要条件であるように考へるのがオートドックスな解釈であろうが、「病窓」つまり病院の窓もしくは病室となるとプラスの要素も加わってくるのだ。「待つ」主語は、病人もしくは怪我人であろうが、看護人かも知れないし、病院の関係者かも知れない。句は何も語っていない。それよりも重要なことは、「夏の朝」が「一番列車」の時刻に符合する事実と、「一番列車」の気配がこの「窓」を通じてもたらされるという感覚が大切なのである。「窓」は健常者の社会へ通じているというイメージがあるのである。

夏の朝 五体投地の若き僧 池田珪子

夏安居の景でもあろうか。「五体投地」している修行僧が「若き」というのである。その举措からか、剃りこぼした頭の青さからなのか、作者には「若き僧」であることが分かつて、何とも清新な気を感じ取ったのであろう。上五の季語「夏の朝」の季語が、句全体の雰囲気担保している。

夏の朝 牛乳壘に白き筋 村杉清吉

飲み終えた「牛乳壘」の外側に牛乳が垂れたのであろう。まるで少年か青年か、それとも若年の成年の举措である。そしてまた句柄もそれに合わせて若々しい。上五の季語「夏の朝」は無論だが、「牛乳壘」「白き」のすべての措辞のベクトルが同じ方向性をもつて構成されていて、そのベクトルの合成が強い生命力を創り出している。この作者の肉体年齢は実年齢よりも遙かに若い。

鋏に打つ楔の音や夏の朝 鳥羽和風

鋏の手入れに楔を改めて打ち直しているのである。しっかりと嵌め込んで柄と鋏刃の密着度合いを確定しているのである。「夏の朝」の農事の一コマであろう。「音」の質感が伝わってくるような気がする。

起き抜けの一杯の水夏の朝 森本早苗

健康の為か、それとも美味しいからなのか、多分その両方なのではあるまいか。朝の水一杯については、六代目菊五郎の「下戸には分からね水の美味さよ」という名台詞があるように実に美味しいものであることは筆者も大いに同意する。座五の季語「夏の朝」なれば尚更である。昨今は、寝ている間にも熱中症に注意を要するということで、水分補給は欠かせないものとなった。素直に詠んだところに水の有り難味が演出されている。

大村節代 選

鼓
笛
集

行合の日に開^{はな}りて秋簾
存へど小さき稲穂や余り苗
人工の鳴き声響く稲田かな

反町 修

沼青く風は木の間に夏の山
蝙蝠が夜汽車を送る山の駅
打水の赤き如雨露の象の鼻

新井孝磨

百号のキャンバス狭し秋の山
マイムマイム踊る校庭空高し
庭にまる書いて角力や令和の子

染谷正信

雨降るや郡上をどりの夜が明ける
秋灯下積んどく本のより多く
罌雲砂団子ある塀の上

梅澤輝翠

秋の夜や馴初め語る恥づかしさ
秋の夜ロックグラスのアイス鳴る
まんまるの地球儀半分秋の夜

北山建治郎

夏飛ばす黒部のダムの大放水
あちこちに井戸新涼の城下町
鬼灯を鳴らし少女期巻き戻す

西幅公子

金継ぎの皿がもてなす夏料理
お師匠はんの口三味線や青すだれ
古書店の暖簾西日を吊るしをり

森美枝子

日没の蟬の合唱森の中
夕暮の澄み渡る空処暑の富士
これと言ふ形見なき父墓洗ふ

千坂平通

どぶろくや話し相手に好好爺
料理本基本通りに茸飯
好物の梨も供物に三回忌

空の青もらひて低くしおからとんぼ
独り待つバス停そよと秋の蟬
どつさりと無花果を持って地主の来

単線の光るレールや新樹光
強面の活劇役者顔に汗
和三盆菓子 of 匠の夏帽子

夕涼み和紙のシェードの薄明り
能舞台帯に挟みし秋扇
白桃や赤子の尻の蒙古斑

秋麗や母の視線の定まらず
学童の群の中より秋の蝶
杜の樹の深き彩づき冬隣

野村美子

阿部幸代

武田重子

湯浅 和

山下ユリ子

☆

☆

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2022年 **11** 月号

特集 感銘句ヒストリー
 「初学の頃、転機の時、現在の三つの時期に分け、その時に感銘をうけた句を紹介！」
 遠山陽子 鈴木しげを 淵脇 護
 本井英 水田むつみ 角谷昌子
 井上康明 辻村麻乃 関悦史

特別作品21句 大竹多可志
 クラヒヤ 俳句界NOW 稲畑廣太郎

人称代名詞の効果
 ○人称別、俳句セレクション
 「一人称」佐藤成之 「二人称」黒澤麻生子
 「三人称」高勢祥子
 ○論考「作品における人称代名詞」
 山田耕司 岡田一実
 ○自句自解
 「一人称」依田善朗 浦川聡子
 「二人称」木暮陶句郎 藤井あかり
 「三人称」山下知津子 黒岩徳将

※セレクション社「玉梓」名村早智子

私の一冊 今村潤子「火神」
 佐高信の甘口でコンニチハ！
 江成常夫（カヌマン）

「対談」
 「俳句界」投稿欄 一流選者14名！
 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。
 株式会社 文學の森 株 株 株
 お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

鼓笛集作品評

大村節代

存へどなから小さき稲穂や余り苗
人工の鳴き声響く稲田かな
反町 修

移植した小さな稲が、しっかりと根付き、稲穂が揺れる。田植の時に、残った苗も植える田があれば、同様に稲穂が出て、米が実るのに、もったいない事である。その田を守り雀やら鳥を追い払うのに、昔は案山子が睨みをきかせていた。だが、今は鳥の嫌がる人工音を響かせる、とこの句で知った。鳥獣も進化して、歩けないのか案山子と馬鹿にして、効果がないのだろう。

蝙蝠が夜汽車を送る山の駅
新井孝磨

蝙蝠は唯一飛べる哺乳類である。決して鳥ではない。インプの童話「卑怯なコウモリ」の話は、獣と鳥が争うと、コウモリは両方にいい顔をして、両方から嫌われるという話である。獣でも鳥でもない、どっちつかず蝙蝠だとは人間の作った勝手な話である。但し蝙蝠は沢山の病原菌を持っているので、あ、蝙蝠だ、終列車で送る人がいないので、送ってくれているのかなと、遠くから見るのが、良いようだ。

鼓笛集巻頭（九月号）

私の好きな一句（自句自解）

元田亮一

駅員等 吾より若し秋の宵

先日、駅で知人と待合せた。少し前に到着し、行き来する駅員を眺めていると、皆自分より若い事が付いた。無論、駅員が若返ったのではない。人の流れは途絶えず、変わらずだが、自分の立ち位置が変わったようだ。あらためて、諸行無常を感じ、流れゆく月日の中の身の処し方を考えたのである。

マイムマイム踊る校庭空高し
染谷正信

運動会やキャンペーンファイヤーの定番のマイムマイムは、フオークダンスの代表曲。マイムとはヘブライ語で水を意味し、イスラエルの楽曲とか。しかし、そんな事は誰も気にしていない。この曲が流れると皆、無心に踊り出す。チェンジングパートナになって、あの人この人と手を繋いだ昔が甦る。季語空高しが状況を表現して心地良い。

句集喝采

近藤徹平

◆五明 昇「旅信」

文學の森

著者略歴 昭和十九年長野県長野市生。同四十二年信州大学卒、平成二十一年「水明」入会。新珠賞・水明賞・季音賞受賞。句集『花林橋』『道草』既刊。令和四年五月本句集刊行。

山本鬼之介主宰は序に「実に上手い。句意が鮮明で容易に共鳴できる」と記す。筆者も著者の手中に掬められる。

気張らぬと決めたる余生草の花

白魚の軍艦巻きにある平和

一湾を屏風囲ひに雲の峰

悠然と夕焼食らふ佐渡島

弓張月従へて行く外航船

木曾節を葉味に峡の走り蕎麦

板長が絵皿に咲かす河豚の花

裂帛の「押忍」に始まる寒稽古

職業人はとかく外部の視点に無頓着な所があるが、著者はその殻を破り、鬼之介主宰と共鳴する俳人となった。第一句、余生を生きる人への助言。第二句、白魚から平和へ見事なワープ。第三句、第四句、句集の標題とする程旅行好きの著者は内陸県出身だが海の句も得意。第五句、海外にも出掛ける。第六句、木曾節を葉味も季語で納得。第七句、河豚刺しを食った体験で納得。第八句に対し鬼之介主宰は序で『押忍』かはす五明昇と春の月 鬼之介』を返す。見事。

◆星野和葉「永字八法」

東京四季出版

著者略歴 埼玉県旧大宮町生。昭和五十六年「水明」入会。水明賞・季音賞・かな女賞受賞。埼玉県俳句連盟常任理事。さいたま文芸家協会理事。

山本鬼之介主宰は序に、著者（旧姓名・永峰和子）が星野光二氏と結婚した時は将来お二人で俳句をやり、更には夫君が「水明」主宰を継ぐとは夢にも思わなかったであろうと記す。著者はあとがきに、句集の刊行を早くから勧めてくれた泉下の夫君へと断って「お待たせしました」と記す。

駕籠の扉の開く気配して雛の夜

炎天を行くもしかして鬼女の顔

筆持てば永字八法白木槿

万緑に丹で立ち向かふ五重塔

梅雨入りなんぞ撤回せよと紗一アハハ

黒ビールで乾杯共に脱稿す

ひとり聴く第三楽章霜の夜

第一句、三人の息女と雛の夜の幻想。第二句、炎天は美女も鬼女の顔に。第三句、句集の標題句、永は著者の旧制永峰より。第四句、溢れる緑に五重塔の赤が冴える。第五句、星野紗一水明第四代主宰をしのぶ。第六句、主宰と編集長の著者が原稿を各々書き終えて夫婦に戻り乾杯。第七句、句集の巻末句、交響曲の終楽章は第四楽章、期待される次の句集。

『埼玉新聞』

七月十日

俳誌「水明」創刊90周年で祝賀会

「原点のかな女に返る」

水明俳句会（山本鬼之介主宰）は6日、俳誌「水明」の創刊90周年と通巻1100号の記念祝賀会をさいたま市浦和区内のホテルで開いた。2年前に90周年を迎えていたが、コロナ禍のため延期に。今年の5月号で通巻1100号を迎え、合わせて祝賀会を開くことになった。

水明は俳人の長谷川かな女が1930年に創刊し、国内屈指の歴史ある俳誌。現在の山本主宰は5代目になる。祝賀会には県内を中心とする会員をはじめ、現代俳句協会の中村和弘会長ら俳句関係者など、計約70人が出席した。

あいさつに立った山本主宰は「私が主宰で3年が過ぎた。水明は『原点のかな女に戻す』という思いで進めてきた」。かな女は自分の気持ちに自由に詠んだことを挙げ、「会員は各自が自分の個性に合った句を詠んでくれればいい」と話した。

祝賀会に先立って全国大会を開催。水明の会員から各賞の受賞者を表彰した。

各賞受賞者は次の通り（敬称略）。

水明賞Ⅱ原田秀子、曲淵徹雄、保坂翔太▽季音賞Ⅱ井上玲子、正木萬蝶▽かな女賞Ⅱ網野月、石山かつ子▽新珠賞Ⅱ森美枝子、元田亮一、後記朝香▽鼓笛賞Ⅱ染谷正信▽山紫賞Ⅱ鳥羽和風

『俳句』

九月号

水明創刊90周年・水明通巻1100号記念祝賀会

夏帯や紅さす指の板につき

鬼之介

七月六日、さいたま市・ロイヤルパインズホテル浦和にて、「水明創刊90周年・水明通巻1100号記念祝賀会」が開催された。

「水明」は、一九三〇年（昭和五年）創刊。五代目を継いで三年半になるという山本鬼之介主宰は、「原点の（長谷川）かな女に戻す」と宣言。「かな女は指導者がほしいことは何も言わずに、ただ、『好きな様におやりなさい』と言われた。私は各自が各自の個性にあった俳句を作ればいいと、率直な考え方で、三年を続けてきた。百年に向けて水明をさらに進めていきたい」と抱負を述べた。

来賓を代表して、「陸」主宰・現代俳句協会会長の中村和弘氏は、「『水明』にはかな女からの、凜とした気品が流れている」と祝辞を述べた。鏡開きのあと、「紫」主宰・埼玉県現代俳句協会会長の山崎十生氏の発声で、樽酒にて乾杯を。会中は、会員によるバンド演奏なども披露され、大村節代編集長、網野月を幹事長の挨拶、最後は、「水明」恒例の三本締めで会は幕を閉じた。



山本主宰の新作（遠州とを交え90周年を言祝ぐ中村和弘氏。

『俳句界』

九月号

水明創刊90周年・通巻1100号記念祝賀会

「水明」（山本鬼之介主宰）創刊90周年・通巻1100号記念祝賀会が行われた。コロナ禍で二年延期となっていた会で、念願の開催であった。

「水明」は長谷川かな女が浦和で創刊。山本鬼之介主宰は挨拶で「五代目主宰を継いで三年、『水明』の原点であるかな女に戻ろうとやってきた。かな女が『好きなようにおやりなさい』と言っていたように、会員各自の個性に合った俳句を作って欲しい」と語った。

中村和弘現代俳句協会会長の来賓挨拶に続いて、鏡開きが行われ、山崎十生「紫」主宰の乾杯で祝宴となった。当日は天気にも恵まれ、盛会裏に終了した。

○創刊 昭和5年 ○主宰 山本鬼之介



長谷川かな女が現在のさいたま市浦和区で創刊。季語を入れて自己の個性を活かした俳句を詠む。

佛燈に火蛾水争ひのありし村

鬼之介

『俳句四季』

九月号

令和四年「水明」通巻一一〇〇号記念全国大会

七月六日（水）、山本鬼之介主宰「水明」の創刊九〇周年・通巻一一〇〇号記念祝賀会が、さいたま市のロイヤルパインズホテル浦和で開催された。

午後の全国大会では、令和三年度会計報告や「水明六賞」の授賞式等が行われた。今年の水明賞は原田秀子・曲淵徹雄・保坂翔太氏。季音賞は井上玲子・正木萬蝶氏。かな女賞は網野月を・石山かつ子氏。新珠賞は森美枝子・元田亮一・後記朝香氏。鼓笛賞は染谷正信氏。山紫賞は鳥羽和風氏。

夕方からの祝賀会で山本主宰は挨拶に立ち、五代目主宰を継承してから、「水明」を原点の長谷川かな女の俳句に戻そうと頑張ってきた、かな女は「自由に好きなようにおやりなさい」と言っていたので、会員各自が自分の個性に合った俳句を作ってほしいという気持ちで続けてきた、と語った。中村和弘現代俳句協会会長の挨拶の後、山本主宰ら五名が「水明」の法被を着て鏡開きを行い、「紫」主宰・山崎十生氏の音頭で乾杯となった。

マネキンを目白へ運び冬霞

鬼之介

『いには』 七月号

受贈書籍紹介 木嶋純子

山本鬼之介句集『マネキン』

文学の森 令和4年刊
昭和46年から令和3年までのおよそ85句を収めた初句集。「水明俳句会」主宰継承を機に上梓。あとがきに、「真新しいマネキン人形に遭遇したことが、以降今日まで、俳句と深く係わり合う切っ掛けとなった」と記す。マネキンに代表されるように、枠にとらわれず幅広い句材をしなやかに切り取る。俳歴50年に裏打ちされた重厚さと軽やかさが印象に残る。

全8章、各章の題をなす句より

マネキンを目白へ運び冬霞

動乱や雪降る丘を見上ぐれば

雪中航路小千谷の人と隣り合ふ

しくじりも受けて二月の江戸手妻

春待つや忠治の山も野佛も

万屋の奥の奥から竹夫人

十三の琴柱の影も夏座敷

燕にも五代の人格蔵の町

▽S13年東京都生。「水明俳句会」第五代主宰を継承。現代俳句協会会員、さいたま文藝家協会会員。

『軸』 七月号

句集紹介 山口 明

『マネキン』

山本鬼之介著

しばらくはキャベツの芯を噛みたまへ
突堤に靴一つの夏景色
十月や鍵屋の辻の今の道
雪空や俄か仕込みのチンドン屋
ぶらんこに居れば母なき少年期
三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ
姉様と呼びたき人よ白桔梗
上げ底の靴買ふ男十二月
陽炎の待つ文豪の散歩道
鉄線を咲かせ勝負を解くをんな
囲めく私道の奥の烏瓜
沖は靈天様になるひと梶芽衣子
描きすすむ眠き少女とさくらんぼ
彼の歌の一本杉のある花野
探梅や心の奥の秘境まで
◆昭和13年 東京都生まれ。
同46年「水明俳句会」に入会。
同48年 同人誌「面の会」に入会。
同54年「水明俳句会」の無鑑査同人になる。

平成26年「水明俳句会」の副主宰に就任。
同30年11月「水明俳句会」の第五代主宰を継承。
結社賞 水明賞・季音賞・かな女賞。
所属 現代俳句協会会員・さいたま文藝家協会会員。

『マネキン』は、著者待望の第一句集。上梓に至る経緯や意図について知りたくて、短編風に綴られたあとがきに眼を通す。俳歴が半世紀に及び、研鑽を積んできた俳人ならではの率直な感慨や為人に触れることが出来て興味深い。

その後、作品世界に浸る。自然体で自由闊達な作風は、映像美豊かで背後に人生の隠し味というべき物語を滲ませて、乾いた心を潤してくれる。些細なことに折れやすい気持をリフレッシュしてくれる。そんな俳句の持つ伸び代や奥深さに出会える、正に至福のひとつ。

一気に読むのも、じっくり時間をかけて読むのとも読み手次第。豊かな俳味や作家性に秀でた俳人との出会いは格別。繰返し読み耽りたい愛蔵版。

文学の森刊 令和4年1月20日発行

『雪嶺』 七・八・九月号

句集紹介 石本雪鬼

句集「マネキン」山本鬼之介著

著者略歴

昭和十三年 東京都杉並区で出生。

昭和四十六年 「水明俳句会」に入会。

昭和四十八年 同人誌「面の会」に入会。

昭和五十四年 「水明俳句会」の無鑑査同人。

平成二十六年 「水明俳句会」の副主宰。

平成三十年十一月 「水明俳句会」の第五代

主宰を継承。

結社賞

水明賞・季音賞・かな女賞

所属

現代俳句協会会員・さいたま
文藝家協会会員

句集名「マネキン」は著者がかつて、真新しいマネキン人形に遭遇したことが、今日まで俳句と深く関わり合うきっかけとなった、マネキンを目白へ運び冬霞

による。身辺俳句からの脱却に悩んでいた著者はマネキンの姿をした俳句の神様から啓示

を得たそうである。

著者ならではの視点を感じた句は、
ぶら下がるだけの鉄棒春の暮
葉柳に神籤結べばスパイめく

片蔭や洗濯物の乳の部分
幣に春風祈願の中身らちもなし

雨女といはれ驟雨の宵祭
昼寝して人魂譚を聞きにゆく

冠省不一の文が来りて花曇り
柴垣や鰻の「松」を声高く

祇園など花街や祭にも作者独自の切り口が
あり華やかでよく見ていなければ作れない。

色里の名残の道を黒揚羽
道ならぬ文焚くけむり夏の暮

祇園会や眉毛の下も剃りまひよか
妾宅へ祇園囃子をはこぶ風

葛餅を召せと柴又もと小町
離れ家に盛り塩凜と竹の春

地毛で結ふつぶし島田よ三社祭
祇園会や女ひと言「好かんたこ」

自然と人との関係で季節感溢れる句だと思
ったのは、

朝東風や離島へ向かふ一教師
倒立の諸手が四五歩青き踏む

小倉アイスの小豆はりつく糸切歯

流離うてみたくなる野や曼珠沙華
二本目の牛乳嚙んで緑濃し

葦原へ手柄を立ててに蟻の列
吹雪く夜や老妓ぼつりと来し方を

特に倒立て青き踏むは、手に青草の感触が
蘇るようであり、視覚でも手の感触でも季節
感に満ちている。

温かなユーモアに溢れ、共鳴した句は、

ペコちゃんのを頭を撫づる春彼岸
しくじりも受けて二月の江戸手妻

胸で聴くちろ鳴く夜の平家琵琶
婆かほゆし案山子に深くお辞儀して

瀧行の禪つかれ冷まじや
秋空や進みがちなる腹時計

著者は水明俳句会第五代主宰で水明創刊主
宰、長谷川かな女を詠じている二句もある。

年頃のかな女の写真秋の昼
くろがねの匂ふ水こそかな女の忌

発行 令和四年一月二十日

『鳩の子』 八・九月号

俳書・句集に学ぶ

山口 登

『旅信』五明 昇著

文學の森

旅の間に旅に恋する去年今年

著者の第三句集。旅が好きで、国内外を旅あつたのが俳句と言えるかも知れませんが、新涼が坂下りて来る馬籠宿

鍵かけぬ峡の一村星月夜

安曇野に薫の輪高き雪解晴

烏賊火燃ゆ遠流の島を遠巻きに

ポツタムの空の青さよ敗戦日

旅の途中で得た数々の美しい詩情が味わい深く季語の輪旋が巧み。五句目、中七が身に

湯上がりの天使真中にこどもの日

ご家族の仄々とした景も佳い。

持越しの大願重き古曆

人生の旅路での大願が成就されることをお祈りしたい。

昭和十九年長野県生まれ。平成二十一年「水明」入会、星野光二主宰に師事。二十二年水明同人。二十五年「鳥羽谷」同人。三十年星野光二逝去、山本鬼之介主宰に師事。現代俳

句協会会員。埼玉県在住。

『樹』 八月号

出窓より見た俳句

長澤きよみ

みずゝ刈る

ひとひらがきりりと巨き洗鯉

ケルン積む男に傾ぐ稚児車(チングルマ)

焼岳に火を放ちたる大西日

学生時代テニスの合宿は、大阪を抜け出し

涼しい信州へ毎夏行っていた。夫はそのころ

山男だった。それ以来久しく行っていない信濃

の国「枕詞みずゝ刈るに惹きつけられて行き

たいなあ美味しそうだなあと読んでいました。

信州の鎌倉と言われる上田塩田平の鯉ですね。

千曲川の流水がきりりと引き締めるという。

五明 昇

『岳』 八月号

句集縦横

斉藤すみれ

◎『旅信』五明 昇
俳句は旅先から郷里への旅信

昭和十九年長野県生れ。平成二十一年「水明」入会。星野光二に師事。新珠賞。二十五年鳥羽谷賞。鳥羽谷同人。水明賞。季音賞。三十年星野光二主宰逝去、山本鬼之介に師事。令和元年水明季音「雪」欄(無鑑査同人)。現代俳句協会会員、埼玉県俳句連盟参与。第三句集。

裂帛の「押忍」に始まる寒稽古

山本主宰の序文によると、受賞者の余興に

てパンカラ学生を彷彿させた五明氏は、高校

時代応援団長であったとのこと。

新涼が坂下りて来る馬籠宿

烏賊火燃ゆ遠流の島を遠巻きに

木曾節を葉味に峡の走り蕎麦

生来の旅好きで、京都の観光文化検定試験

二級の資格を取得。全国社寺巡りを趣味とし

満願を達成された。

短夜や肺腑に沁みるフアドの唄

地の果てに始まる海の大夕焼

海外も四十ヶ国歩いた由。「フアド」と「地

の果て」はポルトガル詠。

夏座敷長押の父母と水入らず

夏瘦も知らず戦後を直走り

父母、己をしみじみと振り返り感慨深い。

(文學の森 令和四年五月十四日刊)

水明例会

第一例会（浦和）

境 茂木和子
延昭

立秋の風のカーテン高架駅
やや太く眉引きなほす今朝の秋
秋立つや石庭の波鮮らけし
読経のごと連子抜ける蟬時雨
背に風沖に白波秋立つ日
秋立つや線状降水帯の赤
読点にふかく息継ぐ今朝の秋

治子
順子
稀香
喜恵
延昭

秋籬古書音読の声漏るる
立秋や折丁ままる水明誌
句読点を無視の歌声星月夜
糠床の天地返しや今朝の秋
今朝秋と思ふ厨の戸を開けて
被爆者の朗読劇や秋来たる
水引草ぼつりぼつりと経を読む

以上特選
マスマシ
節代
チアキ
和葉
順子
はるみ
治子

第二例会（東京本所）

青木鶴城報

葉を洗ふ水の手触り今朝の秋
立秋や白球描く放物線
防人の読み人知らず法師蟬
葉に揺るる空のさなぎや今朝の秋
花束に結ぶりボンや今朝の秋
秋夕焼読谷村の海の色

稀香
亮一
徹平
理恵
喜恵
延昭

禍尺きぬ星に生まれて盆の月
身の振り解きて朝顔開花せり
茄子紺の湯船や夏の夜の海
厩橋東詰にて盆の月
光二星天にまします盆の月
盆の月兵隊さんは戻らずと
新走紅を残せし升の角
垣の背を超えてどうする牽牛花

峰雄
道子
いちい
玲子
竺仙
みどり
鶴城

以上特選

第三例会（東京）

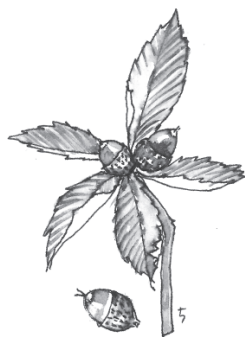
五明
曲淵徹雄昇報

杯置きてふと見上ぐれば盆の月
朝顔や観察日記もありました
秋の雲われ寂寥を味はふや
盆の月墓石愛でて手を合はず
ひとり行く旅路は長し盆の月
朝顔の鉢を抱へる子の大輪
盆の月地酒樂しむ父娘かな
隅田川の夜空大人し盆の月
朝顔やラジオ体操皆勤賞
四囲の山樹樹の匂ひて盆の月
終戦日繰越残のある帳簿
提灯の炎のゆらぎ盆の月

士史
利子
米子
弘子
道子
則子
敏江
峰雄
みどり
玲子
竺仙
鶴城

桃熟れて家中楊貴妃の匂ひ
桃挽いで汗はむ乳房疎まじき
白桃や胸ゆたかなる観世音

喜久
大場順子



喜寿なほも多感なる日々水蜜桃
桃沈めても晩節の恋浮き上がる
桃供へ悔恨少し甘くなり
夏雲の高きを深く映す沼
男日傘が颯爽と行く丸の内

白桃や水うつくしき吉備の国

服薬の後の一口水蜜桃

白桃にかなふ少女のたなごころ

道道の影なき影や星月夜

栃の実ぞ降る偲ぶよすがも無き街に

桃供へ遺影と話はつむ夜

山陽道桃売る幟に桃太郎

白桃を浮かべアルプス伏流水

大場順子

萬蝶

理恵

徹雄

昇

以上特選

大場順子

萬蝶

徹雄

雅夫

理恵

康世

喜久

昇

第四例会 (浦和)

境 延昭
石井 喜恵 報

滴りに寸時を息ふ歩荷隊

夏瘦せて眼光勁き老禪師

滴りに苔青々と神の岩

滴りを受けて輝く生命線

滴りに生き返りたる歩荷かな

撫で肩の骨の所在や夏やつれ

滴りのためらひ落つる間合かな

滴りの一部始終をマリア像

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報
河野はるみ

故郷の縁台恋し天の川

暮れなづむ刻の静寂法師蟬

沸き立つ勢ひ雑木山から法師蟬

法師蟬その一生を鳴き通す

法師蟬ひと鳴きごとに遠のけり

夕づきて余情をかもす法師蟬

天窓に流れ込みたる天の川

夏瘦のたよりのなき身の湯浴みかな

滴りを片手で掬ふ山女

梅干をそへて白粥夏負けす

夏瘦けて首に重たきベランダント

夏負けと言うてあれこれ長電話

滴りの太りて落つる真珠光

滴りの音の暮れゆく奥信濃

滴りに苔さえざえとさみどりに

滴りや岩壁を這ふ瑠璃の花

夏瘦せて端然と座す奥座敷

隧道の滴り止まず天城越え

滴りや石切る音の溪向かう

滴りやメトロノームの四拍子

夏瘦の祖母が好みし紺紵

滴りやライトアップの鍾乳洞

由紀子

美佐尾

玲子

順子

光子

曆文

昇

でん治

マスミ

恵子

翔太

延昭

修

寛治

喜恵

潮騒や浜辺に仰ぐ天の川

寄る年のふる里遠し天の川

法師蟬木立の中の五重の塔

谷川のせせらぎ消さむつくつくし

安住の地なりこの町天の川

天の川妹漕ぐや瑠璃の舟

貝塚の貝累累と天の川

天の川澄めり地球は渴望す

若松例会 (京橋)

正木 萬蝶 報
石田 慶子

満天の星降るやうに揚花花火

銀シャリや清のやうな揚花花火

天心にいま精魂の揚花花火

一途な思ひ忍びされるや大花花火

手花花の明かりの作る家族の輪

頬濡らす他校の校歌夏の果

揚花花掠めウルトラマンの影

ナビに無き道直走り遠花花火

花火果て子を負ひ歩む家路かな

斬られ役すつくと立ちてかき氷

ほろ酔ひの父の合図の庭花花火

好きな子の足元ねらひねずみ花花火

花火果て音なく芯よ水に落つ

揚花花果てて夜空の緩みけり

玲子

義子

水尾

はるみ

宣子

理恵

美佐尾

佐江

月を

月を

月を

佐江

理恵

マスミ

鶴城

萬蝶

以上特選

月を

京子

マスミ

慶子

千春

はるみ

佐江

以上特選

以上特選

筒持てば火焰放射の花火かな
柝席の二重弁当大花火
闇丸め練香花火くわうくわうと
二年ぶりの笑顔の母の夏衣
手花火の手より星屑撒き散らす
遠花火背を見せ窓にみし人よ
病床の窓越しに聞く遠花火

俊 晴
鶴 城
理 恵
紀 子
倭 子
ひろこ
萬 蝶

昔話あれこれ 20

大長谷王の怒り爆発

大長谷王おほほつせのおおきみ（後の雄略天皇）はこの時まだ少年であったが、兄・安康天皇が殺害されたことを聞き、大いに怒り直ぐに、兄の黒日子王くろひこのおおきみの許に行き、「神や魔物でなく、人が天皇を殺しましたよ。どうしましようか。」と話したが、黒日子王は

驚きもせずいい加減に聞き流した。

大長谷王は、その兄を罵り「一方では天皇であられ、一方では兄であられる方が殺されたというのに、よくもそんないい加減な態度でいられるものだ。」と言って、兄の襟首を取って引き摺り出し、刀を抜いて殺してしまった。

次に同母兄の白日子王しろひこのおおきみの許に行き同じように告げたが、白日子王も同じようにいい加減な態度を示したので、襟首を掴んで引き摺り出し、穴を掘って立ったまま埋めると、腰まで埋めた時、両眼が飛び出して死んでしまった。

大長谷王、目弱王まよわのおおきみを滅ぼす

大長谷王は軍勢を集め、目弱王の逃げ

込んだ都つぶら夫良おみ意美の邸を包围した。

都夫良意美は自ら進み出て武器を捨て、「昔から、臣、連が王の宮に庇護を求めたという話は聞いておりますが、まだ王子が臣下の家に庇護を求めた例は聞いておりません。この卑しい私が力を尽くして戦っても、貴方様に勝てるはずはありません。ただ、私を頼ってこの家に逃げ込まれた王子を私が見捨ててもお見捨てするわけにはまいりません。」と言って家に入り、目弱王に「私は手傷を負いました。これ以上戦えません。」と告げた。目弱王は、自分を殺すように命じ、都夫良意美は王子を殺し自分の首を切つて死んだ。

（つづく 丸山マスミ）

各地句会



柿の木塾 (浦和)

旅回りの一座立寄る走り蕎麦
 霊峰の水まろやかに走り蕎麦
 うまさうに佐渡が頬張る秋の雲
 昼飯は江戸つ子の蕎麦走り蕎麦
 ビル群の後ろ楯なる秋の雲
 秋の雲秩父一揆の筵旗
 庭さきにごろり石臼走り蕎麦
 新蕎麦や水車廻るよ休みなく
 珊瑚の会 (浦和)
 新涼や勢ひづきし筆の先
 風音も大河の水も涼新た
 お手玉の数珠子に混じる鈴の音
 新涼の豆腐の白さ際立ちぬ
 開墾地隅に数珠玉一絡げ
 一礼で潜る新涼の大鳥居

節代 水尾 昇 俊晴 和葉 かつ子 恵子 和子

手鏡を拭ひ新涼の紅をさす
 新涼や喉ひやりと薄荷糖
 女騎手と新馬すくつと涼新た
 新涼や木曾川に乗る水馴れ棹
 新涼や波音かすか無人駅
 コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)
 ビル街の町家西日が痩せ細る
 大西日掃除機ルンバ居間走る
 ぱつかんと開けて泡噴く缶ビール
 西日背に屋台に並ぶ昭和かな
 大西日一点を追ふ九回裏
 西日浴びいつの間にやら古畳
 古書店の暖簾西日を吊しをり
 石に寝て鳥葬かくや大夏野
 めだか句会 (浦和)
 虫の足外れぬやうに真顔の子
 野分後蕾残りて鉢軽し
 台風や空を見上げて待ち疲れ
 近道を通せんぼする虫の闇
 台風や収穫間近の落ちし実を
 隣家の如雨露蹴ちらし野分行く
 台風や高温多湿吹き飛ばせ
 枇杷の実や笑顔広がる宴の後
 湯上がりの縁側に風虫の夜

喜恵 史代 恵子 マスミ 節代
 延昭 淑子 健司 まさ子 早都子 俊晴 美枝子 昇

虫の声ソリストならず遠慮がち
 暮れなづむ路地の隅より虫の声
 口笛を吹く六地藏昼の虫
 明かるさの見えたる帳簿野分後
 円卓の会 (浦和)
 新涼や備前の壺の肌触り
 空蟬のたましひ残る夜明けかな
 新涼や篠竹さらと宵の風
 瓜坊や電気機関車急停車
 西瓜浮く盥の中の満の月
 新涼や瘡蓋剥がれ膝に風
 秋涼し手水を溢す竹柄杓
 秋蟬の白き腹見せ動かざる
 神戸大池句会 (神戸)
 蘭の香や出窓かがよふ異人館
 稲妻のモダンな窓を煌めかす
 熊蟬に告ぐ熱中症に注意せよ
 花衣の会 (浦和)
 独り居に持て余したる大き桃
 さみしやかなかななくよをちこちに
 一病を得てカナカナを聴くばかり
 蛸をトレモロと聴く奥州路
 蛸の声浴びながら川下り

知子 月を 鶴城
 道一 亮一 修
 翔太 輝翠 静香 月を 鶴城
 玲子 千津子 早苗
 みよ みち 峯雄 章嘉

たかなな俳句会 (川口)

脳トレは苦吟がよしと秋の空
竹籠の鈴虫鳴かず腕まくら
長きこと桃を吟味の老夫婦
鈴虫に心やすらぐ仕舞風呂
秋澄むや意外に長き頭脳線
鈴虫に霧吹く夕べ鳴きいそぐ
脳外科に緊張走る秋の雷

若 鮎 句 会 (浦和)

妻一人炎天の中帰りけり
鶏頭やお地蔵さまは二頭身
鶏頭の拳に夕日朱朱と
鶏頭は雨にゆらがぬ炎かな
鶏頭花女はいつも強きもの
風の止む夕べの浜の残暑かな
雌猫の難面い素振り残暑光
鳴き尽くし骸となりて残暑かな
風に触れ緋の色うごく鶏頭花

水明松本句会 (松本)

通り雨紫陽花の彩あざやかに
朝昼晩メニユーに悩む夏休み
雷雨去り庭の草花生き生きと
心地よく川の音聞き髪洗ふ

野 ば ら の 会 (浦和)

駅さやか最高地点の小海線
爽やかや自然素材のワンピース
子規庵の縁より仰ぐへちま棚
爽やかにカウベル鳴らし牧の朝
早朝の背伸び高高爽やかに
ミモザの会 (横浜)

まくなぎや赤いネイルの手が泳ぐ
爆音の碎け四方に夜半の雷
蟻螻払ふ一瞬の薄暗がり
まくなぎを引き連れ猫のいういうと
まくなぎを振り払ふ手や踊り出し
茄子漬のとなりと同じ色の猪口
まくなぎを物ともせず草野球
蟻螻や払へど残る過去の嘘
芽 吹 句 会 (浦和)

鬼灯や逝きし娘の里帰りに
出帆の銅鑼の音高し秋の空
落鮎の流れに雲の影くだけ
虫の音の戸口に迫る侘住ひ

板長の鯉の骨切る音かろし
胡弓の音に揺るる編笠夜半の秋
秋の夜や川の壺湯に女声

水明澤つくし句会 (大阪)

人の世の波瀾万丈火花果つ
故郷へ積乱雲を引き連れて
君の背に別れの予感晩夏光
暑き夜の海馬鍛へて俳句詠む
盆踊下駄の齒かびてしまふまで
信田妻影絵に妖し夜の秋

鶴川山百合句会 (町田)

金魚鉢騒ぎて音の無かりけり
甘いトマトは嫌いな人です自炊派です
歌麿の女気取りで蚊帳に入る
真つ先に金魚掬ひへ里の夜
蚯蚓乾ぶへの字くの字に身を折りて
トマトもぎ頬張る少女白き顔
「初蟬」と弾むメールが二人から
掬ひたる金魚持て余してをりぬ
シャバーサナすれど眠れぬ熱帯夜
厄除けの風鈴靡くいつせいに

水明鬼石句会 (鬼石)

終戦日馬上の父はセピア色
青柿も重さうになり雨の中
さぎ草にときどきミスト喜びぬ
草をわけ土をかきわけ花茗荷

久美子
のり子
小麦
小 麦
義 子
鶴 城
水 尾
静 香
亮 一
稀 香
香 音 子
拓 真
芳 春
万 美
月 を
鶴 城
喜 夫

夏 江
栄 子
茂 子
秀 子
み 子
慶 子
玲 子
史 代
栄 子
由 美 子
萬 蝶
千 春

人 美
智 恵 子
きりり
美 令
洋 子
ゆら女
雄 二 郎
月 を
喜 久
史 代
広 子
由 美 子
千 春
理 恵
美 千 子
玲 子

標の会 (浦和)

朝顔咲く朝日こぼさぬやうに咲く
天高しこだま行き交ふ奥秩父
槍投げのやり天高く発射する
下町の路地に朝顔鉢並ぶ
朝顔に寝ぼけ顔して独り言
朝顔に「おはよう」言つて絵日記に
天高し何処かで何かある地球
天高し心の靄を払ひをり
朝顔の紺の深きに心澄み
ほぐれ初む蕾に力牽牛花

敦子 妙子 裕子 裕之 富子 富子 富美子 千重子 治子

山茶花 (浦和)

蚕豆剥く話の弾む夕厨
そら豆は希望の豆か空を向く
秋近し返信なき友案じつつ
秋近しファイザー四回目終了す
秋近し遙かに見ゆる黒き富士

マスマミ 美江子 光子 清一 綾子

蘭の会 (浦和)

夜の秋縁側で切る足の爪
共に書く終活ノート夜の秋
逆立ちの辞典取り出す夜の秋
鉛筆を削りメモとする夜の秋
睡蓮や昔日のまま今を生き

夕峰 まりこ 風 舍 トエ 比早子

爪紅の傾ぐ手酌や夜の秋
秋の夜グラス片手にシヨパン聴く
弱点を隠すごとくや花豆はなまめ

和歌山水明句会 (和歌山)
せつせつと防人歌碑へ法師蟬
秋暑し時計の鳩が戻らない
白桔梗亡夫の作りし文机に
本番の白ジーンズや秋気澄む
童舌蘭は突如によきによき天を突く
炎暑にも亀は大食自力あり
盆踊笛と太鼓と下駄の音
混沌の世や渾身の油蟬

隆夫 悦子 珪子 さよ子 粉雪 正信 月城 鶴城 京子

蝸蚪の会 (浦和)

実山椒流水麵の山レシビ
しらびその匂ひ流るる天の川
鈴虫と星の交信する夜かな
天の川語る二人の縁結ぶ
天の川さまよふ星の王子様

るみ子 元美 朝香 さち子 しるく

ウルトラマンに思ひ馳するや天の川
溶岩のごとく流るる火祭や
時忘れ独り野宴や天の川
南から北へ流るる天の川
鈴虫や乱れしままの寝巻紐
濁流の砕く橋脚野分かな

ひさの 礼子 風 舍 月を 鶴城 宣子

あゆみの会 (浦和)
昼寝する長押の父母に見守られ
虹立つやダム放水に大歓声
夕風や鳥を取り巻く長き橋
路線バス終点までの窓の虹
渋滞に疲れを癒す淡き虹
辿りゆく夏蔭長し大手町

俱子 啓子 重子 山遊 藻好

皐月の会 (浦和)

三叉路の角の洋館カンナ咲く
住みなれし庭の片隅カンナの緋
関八州四方八方赤とんぼ
赤蜻蛉吾の肩先に遊びをり
故郷去る駅にカンナの炎ゆる中
滑り込む列車を待つや霧時雨
赤色を増して憎らし唐辛子
カンナ燃ゆ妖しく誘ふフラメンコ
野辺山の駅改札抜くる秋茜

光代 美佐尾 珪子 順子 紀子 静香 孝麿 暦文 きいち

さざきサークル (浦和)

詩の工夫生まるるまでの秋扇
能舞台帯に狭みし秋扇

昇 和

しみついた昭和の匂ひ秋扇
桃を剥く桃のかたちを指を添へ
秋扇ひそかに使ふ未練もの

タ イ 俱 子
和 枝

「押さないで」桃の小さな叫びです
行き交ふ人のピアスきらりと秋扇
花火師のたまひの声大花火
アルプスの峰くつきりと桃熟るる

啓 子 喜 代 子
和 子

青葉の会 (浦和)

戦死の父思ひて仰ぐ盆の月
畔豆や認知度高き故郷土産

美 紗 子
真 理

肅々としきたり通り盆の月
煮染炊き亡き人偲ぶ盆の月
僧庵に幽かな明り盆の月

美 智 枝
美 子

吾をじつと見詰むるやうな盆の月
北の地をゆるりと動く盆の月
鉢の朝顔工事現場を癒したり

公 子 啓 子
洋 子

りんどう俳句会 (浦和)

民宿となりし廢校蟬時雨
アンコールに応ふることく雨後の蟬

翔 太 君 夫

椽の美の多少彫らむ里景色
九尺二間の人情嘶秋初め
少々の塩振るだけよ衣被

サヨ子
正 信

我先に静寂を破る蟬の声
対岸の灯の秘めやかに秋初め
羽衣恋ふ三保の松原蟬しぐれ
悲しみを忘れさせたる蟬時雨

紀 子 君 夫

老人の町は少子化やぶからし
初秋や「少年時代」陽水聞か
つひに訪ぬ虚子記念館蟬時雨

卓 郎 寛 治

稲妻や暗き海へと突き刺さる
稲妻や鏡に歪む己が顔
日本列島被ひつくすや稲つるび
秋蟬の耳の中まで鳴き残る
木簡に恋文もあり草の花

輝 翠 喜 恵
チアキ 燈 女

水明熊谷句会 (熊谷)

順 子 利 子

秋めいて穂先きはだつ千枚田
添書に「是非」の二文字秋めけり
秋めくや手にしつくりと阿六櫛
板一枚敷きて路傍の西瓜売り
新涼や細道行くもまた一興
細々と乱れし日記敗戦日
耳朶ひやり秋めく朝のピアスカ

正 行 卓 郎 秀 子 磴 女 栄 子

若狭水明会 (若狭)

佐 江

解体屋汗止めタオルでこに巻き
草野球むぐらむぐらの球さがし
手に汗をにぎる一投甲子園
何探す律の中の親子かな
山城の曲輪の跡や八重律
妖怪の足跡隠す律かな
ランニング少年に汗輝けり
冷酒や妻も娘も胡坐かき
湧き水にくちづけしたる汗の顔

道 修 平 通 正 信 徹 雄

薄紅葉方一丈の庵かな
処暑の雨子供らを待つ分教場
夕さりの茶室抜けくる処暑の風
虎造の節が酔はせる処暑の雨
来し方をひたすら思す生身魂
処暑の風聖歌聞こゆる石畳
カンパスに少し赤混ぜ処暑湖畔

鶴 清 城

俳句の手ほどき (岩槻)

延 昭 倭 子 佐 江 徹 平

チューバ背におさげの少女花木槿
芭蕉像の草鞋の下の花木槿
底紅のよそ目さびしき夕まぐれ
友好は微笑と打算白木槿

延 昭 倭 子 佐 江 徹 平

虫好きの触れて確かにへこきむし
 ふるさとは生垣多し花木権
 底紅の枝奔放に札所寺
 濁り酒話し相手に好好爺
 相好を崩す婦人や菊花展
 底紅の咲き誇る今朝娘発つ
 底紅や半玉の笑む初座敷
 秋の蝶やけにくすぐる好奇心
 秋日和犬はひ孫の好敵手
 好もしや秋風と席ゆづる人
 好一對連弾ピアノ涼新た

ます美 水尾 義子 美子 忠男 幸代 翔太 卓郎 桂子 久美子 かつ子

☆

☆

句碑清掃

(かな女先生句碑)

水明初代主宰長谷川かな女は、旧浦和市
 (現さいたま市)名誉市民です。そして、さ
 いたま市の別所沼公園と調神社の二個所
 に、句碑があります。

その句碑を、去る九月十二日の常任監事
 会の前に、全員で清掃しました。句碑を丁
 寧に拭き、句碑の囲りの落葉や塵を掃き清
 めました。

すっきりきれいになりましたので、秋日
 和に、散策しつつ見学にお出かけ下さい。

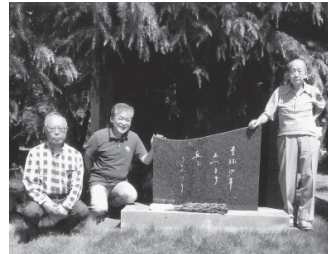
曼珠沙華あつまり丘をうかせけり

(昭和二十八年十一月建立) 別所沼公園

生涯の影ある^{あき}埴の天地かな

(昭和三十六年四月建立) 調神社

←(調神社)
 (別所沼公園) ↓



令和5年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に
発表した作品は不可。
- 締切** 令和5年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員 (9名)

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	井口俊晴
保坂翔太	青木鶴城	日高道を

新珠賞推選委員 (5名)

宇田白鷺	大橋廸代	茂木和子
椎野美代子	波多野寿子	

第6回「水明塾」のご案内

[日 時] 2022年11月3日(木曜日・文化の日)

○午前の部(対象:全会員)

10:00～12:00(9:30受付)

◆講演会

- ・講師:後藤章氏(現代俳句協会幹事長)
- ・演題:「俳句における鑑賞について(仮題)」

○午後の部(対象:同人・季音同人を除く会員)

13:30～16:00(13:00受付)

◆全句講評講座

[会 場] 浦和駅東口パルコ10階第14集会室

[会 費] 午前の部2,000円、午後の部1,000円

[申 込] 10月25日(火)までに巻末添付の申込書に会費を添えて発行所総務部へお申し込みください。

※昼食はありません、昼食、飲み物は各自で持参してください。

※午後の部の「全句講評講座」の受講者は申込と一緒に当季雑詠2句を投句すること。

※会場はコロナ感染症対策のため申し込みの無い方の入場は出来ません。なお、状況によっては、内容を変更する場合がございます。

事業部

「現代俳句カレンダー 2023」 販売のご案内

現代俳句カレンダーご注文の受付を開始します。今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしています。

◆体 裁：B4判の上下二連

◆価 格：1,200円 / 1冊（定価の2割引）

◆注 文：下記の通りお願いします。

葉書に3項目を明記する。

①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

②注文冊数

③受取り方法〔発行所で引取・自宅又は指定先に発送〕

葉書の宛先は、

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町 4-10-21

水明俳句会 カレンダー係

注文締切 10月17日(月) お早めにどうぞ!!

◆備 考：①水明俳句会より下記7名の俳句が載ります。

主宰（短冊揮毫） 網野月を 大村節代

石山かつ子 椎野美代子 大橋廸代 星野和葉

②自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、
実費送料をご負担いただきます。

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉書以外の注文はご遠慮ください。

※ご不明の点については、〔総務部 日高道を〕

TEL 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介

総務部長 日高道を

いかがですか

「俳句日めくりカレンダー」

令和五年の「俳句日めくりカレンダー」の三六五句の中に、また鬼之介の句が選ばれました。掲載句は、五月十八日の「葉柳やむかし銀座に点灯夫」です。明治時代に銀座の街を照らしていた瓦斯燈を点す仕事に従事していた点灯夫に思いを馳せての俳句です。

点灯夫



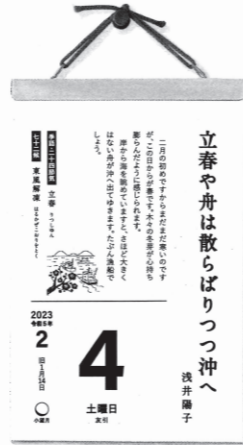
*この画像は、カレンダーにはありません。

宇多喜代子氏を選出された三六五句と、その一句一句に付けられた解説が大いに役立つと思います。よろしければ、直接新日本カレンダー（株）電話06(6971) 4480へご注文ください。

主宰 山本鬼之介

俳句の日めくり カレンダー

2023
令和5年



立春や舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
二月の節分や舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
はなはなと舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
はなはなと舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
2023
4
土曜日
俳句の日めくりカレンダー 2023
サイズ：18.5×12cm・385ページ
「掲載句と俳人の一覧表」付き
監修：宇多喜代子

2,000円
(税込2,200円)

※在庫数に限りがあるため、品切れになる場合がございます。

一日一句、365句を掲載。

江戸時代や明治の句も、現代の句も幅広く掲載。

宇多喜代子氏の解説付き。

すべての引用句に、宇多喜代子氏の解説付き。

作句に役立つ「歴」の情報。

季語、口唇、節句や行事などの情報も掲載。

送料無料！一冊からでも。

まとめ買い割引もあり
ますので検討下さい。

資料をご希望の方は、下記へご請求ください。



新日本カレンダー株式会社

〒537-0025
大阪市東成区中道3丁目8番11号

TEL.06-6971-4480
FAX.06-6972-5885

風 声

○俳句四季八月号——「季語を詠む」欄
我が庭に乞巧奠を仕る

鬼之介

○現代俳句八月号——「現代俳句の風」欄

薫風や氣と氣の揃ふ太極拳

青木鶴城

センサーの感度抜群雨蛙

越田栄子

子のやうに泣ければ六十路かなかなと

杉浦理恵

口遊むラビアンローズさくらんぼ

原田秀子

実梅挽ぎビールケースに一休み

丸山マズミ

現はれて消ゆる少年卯月波

由良ゆら女

○響焰(米田規子主宰) 八月号——「一詠一句」欄

春の雲動かぬままに夜の空

鬼之介

○草笛(太田土男代表) 八月号——「受贈誌一詠」欄

サングラス外し男がなほ野暮に

鬼之介

○くちら(中尾公彦主宰) 八月号——「受贈俳誌美術館」欄

遠州といへば「石松」沖膾

鬼之介

○幻(西谷剛周主宰) 七月号——「受贈誌拝見」欄

花冷やオート・クチュール試着室

鬼之介

○好日(高橋健文主宰) 八月号——「受贈誌御礼」欄

艦長の袖の金筋風光る

鬼之介

○新月(松田碧霞代表) 八月号——「受贈俳誌紹介」欄

山は力を河は情けを愛鳥日

鬼之介

○太陽(吉原文音主宰) 八月号——「受贈誌御礼」欄

新緑に溶くる淑女の乗馬服

鬼之介

○菜の花(伊藤政美主宰) 八月号——「諸家近詠」欄

山は力を河は情けを愛鳥日

鬼之介

○菜の花(伊藤政美主宰) 八月号——「一書一句」欄

新涼が坂下りて来る馬籠宿

五明

○紫(山崎十生主宰) 八月号——「佳什一滴」欄

飛魚や遠流の島の荒岬

五明

○翎(山本一步主宰) 八月号——「受贈誌の一句」欄

鳥雲に一茶の越えし浅間山

染谷正信

草餅や厨の壁に火伏せ札

渋谷きいち

(日高道を抄出)

水明発展基金御礼 (敬称略)

—令和四年八月三十一日現在—

山中みどり	0.5	□	清水桂子	0.5	□
西山貴美子	0.5	□	山本鬼之介	50	□
水落守伊	1.5	□	千坂平通	0.5	□
清水桂子	3	□	元田亮一	20	□
阿部幸代	15	□	水落守伊	6	□
内田恵子	20	□	遠西勢津子	5	□
小林京子	10	□	鈴木貴水	10	□
波多野寿子	50	□	正木萬蝶	50	□
—合計—	185.5	□			□

後記

やっと涼しくなったので、ちいさい秋をみつけに出かけました。別所沼公園のかな女先生の句碑を拜見し、沼のほとりのベンチで休んでいると「あ、赤とんぼ！」秋ですね。

今月号の夏季競詠は、年に一度の全水明人参加の誌上水明大会です。水明集の方が季音の方を抜いたり、こんな筈ではないと思う方がいたり悲喜交々、どうぞゆっくりご覧下さい。

夏季競詠の兼題「金魚」(動物)について「和金」「出目金」など傍題可とご案内しましたが、主宰の夏季競詠の評によると「金魚売・金魚鉢」(生活)等の句が数多あったようです。新しい方が増えていきますのに、案内不足を反省しています。

当覧七月号で五明昇氏の句集を

ご紹介しましたが、同じ季音雪欄作家の星野和葉氏が句集「永字八法」を上梓されました。

あとがきに和葉氏は「永字八法」の句について書いていらつしやいます。この句を発表されたとき一緒に句会にいた私は、永の字には、全ての文字の基本となる八種の運筆が入っていると知りました。永の字をいつも心がけている和葉氏の達筆を納得しました。

今月号の「句集喝采」は近藤徹平氏による五明昇氏、星野和葉氏の句集紹介です。どうぞお読み下さい。尚、お二人の句集がお手元になく、是非お読みになりたいと思う方は、お二人にお電話なさってみて下さい。残部が少しおありとの事ですから、お譲り頂けるかも知れませんので…。

インフルエンザは昨シーズンは鳴りをひそめていましたが、今冬は流行の兆とか、またワクチン、マスクですね。

(節代)

今月のはてな?

- 馬鹿の花 ハマゴウ(浜香夏の季語)
- 天鷲絨(ピロード)
- 熱(ほて)り
- 楽車(だんじり)
- 洗膾(あらい)
- 拵蝶(せせりちよう)
- 聡(しか)と
- 壘(たがね)
- 明(さや)けし
- 難面(つれない)

85 67 66 44 42 30 25 21 17 14 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・水・金)

時間：12時半～午後4時半
(火・木・土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み
(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内をお願いします。)

水明

令和四年十月号
通巻一〇五号
令和四年十月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

季音抄

山本鬼之介

落鮎の流れに雲の影くだけ
男日傘が颯爽と行く丸の内
秋立つや線状降水帯の赤
夏痩せの貝殻骨に翅のおと
颯爽と稜線離る夏の雲
古き唄つと口をつく秋の浜
少年の瞳に少女野紺菊
森を出て白壁の館カンナ燃ゆ
新秋の日差し射し込む奥座敷
虫の秋枯山水に椅子一つ
草分けの女医の碑なりき百日紅
底紅のよそ目さびしき夕まぐれ
雲海や水場を探す縦走路
爽やかに踊る芸子の白虎隊
秋澄むや意外に長き頭脳線
いなつるび廊下の奥に夜叉の面
遠雷や戻らぬ人を待つよふけ
迫り来る雲の峰峰真白しろ

菊池ひろこ
五明昇
境延昭
椎野美代子
島津初花
鈴木康世
大場順子
山田美佐尾
高島寛治
鳥羽和風
井上燈女
梅澤佐江
近藤徹平
大塚茂子
青木鶴城
日高道を
石田慶子
河野はるみ

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

夏季競詠抄

山本鬼之介

蠟石の線路どこまで日向水
 美容院鏡の中の金魚かな
 ひたと止むダムの放水二重虹
 虹の根や余熱をさます登り窯
 鉄工場の汚れし顔のまま夕虹
 虹仰ぐ水禍の農夫手を合はせ
 告白は立ちたる虹の消えぬ間に
 一頭といふ蝶の重さや石の上
 虹消えて現に返る三保の浜
 夕の虹目を離す間に消え失せる
 鏡の中に虹のひとはけ美容院
 旅ゆけば酒旅ゆけば虹二重
 虹消えて明日は奥穂のジャンダルム
 陸言を吐くたび泡を錦蘭子
 敷石に刹那止まるや拵蝶
 虹立ちてグリム童話を二つ三つ
 金魚下げ石堀小路行く舞妓
 君下りて来よ虹の橋消えぬ間に

由良ゆら女
 矢作水尾
 大橋勉代
 境延昭
 永野史代
 横山君夫
 大村節代
 石山かつ子
 五明昇
 網野月を
 柚木治子
 椎野美代子
 渋谷さいち
 正木萬蝶
 小林京子
 染谷正信
 田寺玲子
 石井喜恵

水明例会案内	句会名	日時	会場	指導者	幹事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂境 木和子 延鶴城
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木 鶴城 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延 昭 石井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬蝶 石田 慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早苗